歴史地理学野外研究　第14号　81～116　2010

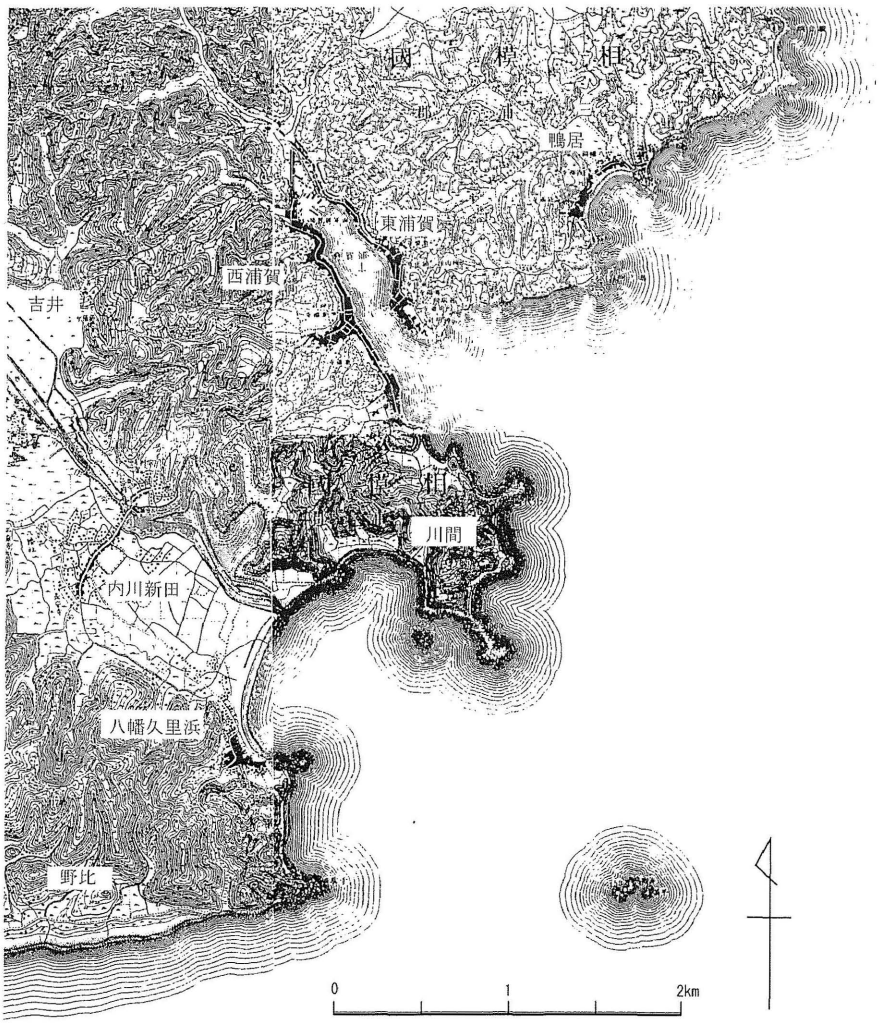
農業からみる近代浦賀町の特質

吉村　雅美・岩本　和恵

Ⅰ　はじめに

近世の浦賀湊は干鰯流通の中継地とされていたが，享保５年（1720）の浦賀奉行所設置以降は，船改めを行う海運の拠点として発展してきた。そして，明治期以降には，陸海軍施設・浦賀船渠株式会社（以下，浦賀ドックもしくはドックとする）の所在地として，その機能や景観を変容させてきた（第１図）。

筆者らは，こうした変容の過程について，近世



第１図　研究対象地域
（『明治前期関東平野地誌図集成』所収地形図「浦賀」により作成）

以来経営を継続してきた商人の動向や浦賀ドックと町との関わりを中心に検討してきた[1]。そして，浦賀町が商工業の町として発展した背景には，上記のような商人が，地域有力者として諸産業の発達に貢献してきたことがあったことを明らかにした。

しかしながら，近代浦賀町に関する先行研究はドックをはじめとする工業を中心になされており[2]，ドック関連業種以外の産業と浦賀町との関わりについては，注目されてこなかった。また，浦賀町の消費地としての特色が明らかにされる一方で[3]，生産地という視点からの検討は十分になされていない。

近代における三浦半島の特色として，野菜生産地域の発展を挙げることができる。この点に関しては，すでに多くの研究の蓄積がある。澤田浩之は三浦半島南部地域がダイコン産地として確立するなか，その作付規模が下肥の運搬労働の条件によって規定されていたことを明らかにした。また，斎藤功ほかは三浦半島における集約的な輪作の発展を指摘し，これを中郊農業地域と位置づけた[4]。これらの農業地理学的な観点による研究に対し，清水克志・清水ゆかりは，当該地域が野菜生産地域として発展した歴史的な経緯について，横須賀・東京といった都市市場との関わりを中心に明らかにした[5]。

以上の研究は，野菜の生産出荷の盛んであった半島南部をおもな対象地域としている。一方で，半島北部に位置する浦賀町の農業の実態は，ほとんど明らかにされていない。これは，浦賀町が周辺地域にとっての市場・消費地として位置づけられてきたことに起因する。また，浦賀町が重粘土壌地域に位置し[6]，耕地が狭隘であるという地理的な条件も影響していると考えられる。

しかしながら，陸海軍の後背地域であり，かつ浦賀ドックを擁する三浦半島において，野菜の増産は，郡一体となって取り組まれた課題であった。浦賀町においても，篤農家を中心として近代的な農業生産が実施されるとともに，近世以来問屋を経営していた有力商人が農会活動に関わることで，農業経営を支えていた。

本稿では，消費地としての性格を持つ浦賀町において，農業生産がどのように展開したのか検討することを通して，近代における浦賀町の特質を生産的側面から明らかにする。そして，農業を一つの事例として，三浦半島における産業振興のなかで，地域的性格を異にする各町村がどのように関わり合っていたのか考察するための一助としたい。

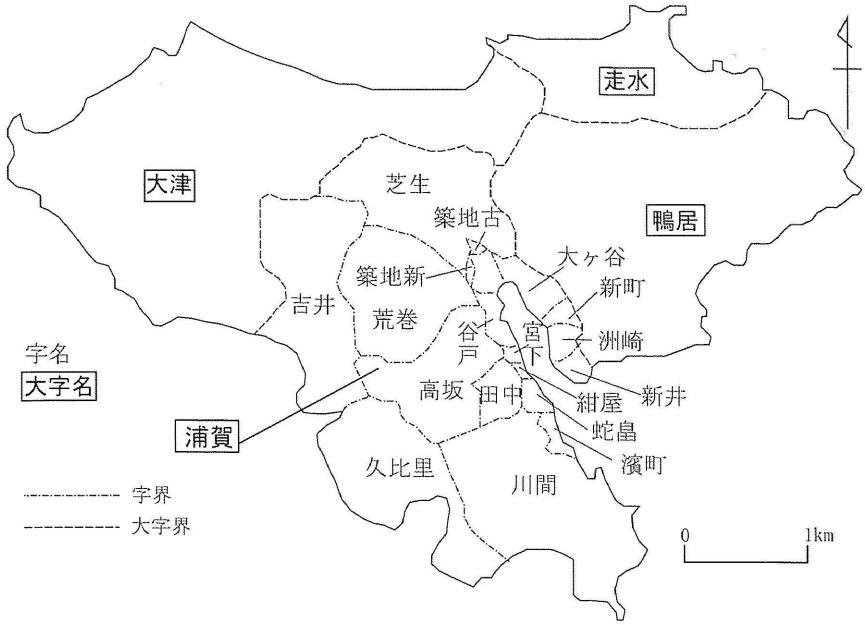
まず，第Ⅱ章では浦賀町における農業生産の背景について，農地の条件および農業と商工業との関わりという観点から，半島内の他町村と比較しつつ検討する。続く第Ⅲ章では，地域有力者を基盤として成立した三浦郡農会と浦賀町との関わりを，蔬菜栽培の奨励や農事視察といった具体例を挙げて明らかにする。第Ⅳ章では，浦賀町農会・三浦郡農会の中心的存在であった白井家を取り上げ，第Ⅲ章でみる農事振興において篤農家が果たした役割や，浦賀町における農業経営と周辺地域との関わりについて考察する。そして，第Ⅴ章では昭和戦前期に発行された『浦賀町報』や荒巻の専業農家への聞き取りから，農会を中心とする明治末期以来の農事振興策が町内でいかに展開していたのかを検討する。

Ⅱ　近代浦賀町における農業生産の背景

1）浦賀ドックの設立と浦賀町

享保５年（1720）に浦賀奉行が設置されて以降，浦賀湊は廻船の寄港地として発展してきた。特に，西浦賀の紺屋・田中・宮下（第２図）には米穀・塩・酒を扱う問屋が所在しており，これらの一部は明治期・大正期においても有力商家として経営を維持していた。

明治５年（1872）に船番所が廃止された後も，明治17年（1884）の時点で，浦賀の船の出入港数・移出量は神奈川県内では横浜に次ぐ数量であった[7]。しかし，明治22年（1889）に鉄道が開通した後の状況について，「浦賀町勢要覧[8]」には，「鉄道ノ施設完備シ東海道鉄道ノ開通アリテ



第２図　浦賀町字名－明治22～昭和18年（1889～1943）－
（『浦賀案内記』，『新横須賀市史　資料編　近現代Ⅰ』付録「三新法体制期の現横須賀市域内の町村区画」により作成）

ヨリ当港ハ衰退ニ傾キ明治二十七年二十八年頃ハ最モ其ノ極度ニ達」したと記述されている。交通網の整備により，物資の陸上移送が行われるようになると，海上輸送の寄港地としての浦賀港の役割が縮小していったといえる。

その後，明治29年（1896）の浦賀ドックの設立を機に，浦賀は工業の町として発展していくこととなる。市村真実は，明治期・大正期における浦賀ドックと浦賀町の関わりを明らかにし，浦賀ドックの設立・経営において，近世以来の有力商人が大きな役割を果たしたことを指摘した[9]。これによると，ドック設立の契機となったのは，明治24年（1891）に浦賀奉行所与力中島三郎助の招魂碑が設立されたことであった。建碑式の席上で，荒井郁之助がドックを設立することを提案し，西浦賀の有力な塩問屋であった臼井儀兵衛が協力を約した。

また，明治30年（1897）の浦賀ドックの株主は166名であったが，このうち57名が浦賀町民であった[10]。臼井儀兵衛は57名中最多の1,019株を保有していた。このほか，多くの株を保有していた町民として，商人の三次六兵衛（150株）・太田又四郎（56株）らが挙げられる。しかしながら，57名中41名の株保有数は20株未満であり，多数の町民が少しずつ株を分有する形でドックの経営を支えていたといえる。後述するように，農家の白井太朗[11]も８株を保有しており，株数は少ないものの，進水式に招かれるなど，ドックとの関わりを有していたことがうかがえる。

このように，有力者の協力によって設立されたドックは，浦賀の地域経済を牽引していった。明治32年（1899）には，高坂の長嶋岩之助らによって「魚鳥獣青物市場開設願[12]」が出されている。このなかで「東京石川島船渠会社ノ支社船渠，又ハ其他ノ船渠設置アリテ，浦賀町及ヒ其附近ニ非常ナル住民ノ増加シ来リ，随テ日用食料品ノ商業ニ従事スルモノモ亦其数益増加シ来候得共，魚鳥獣青物ノ如キハ一定ノ市場ナク」という状況であったことが述べられている。すなわち，浦賀ドックの設置にともなって浦賀町の人口が増加

し，食料品を扱う商業者も増加していたが，魚介・肉・野菜を供給する市場が開かれていなかったのである。そこで，岩之助が中心となって商業組合を設立し，市場を開設することを請願した。このうち，本報告で扱う農業と関わりの深い青物市場は，西浦賀の田中町に設置された。

また，ドックが明治33年（1900）に本格的な営業を開始した後は，ドックに近接する荒巻周辺に飲食店・菓子商や旅館・遊郭が増加し，明治40年代には商店街・歓楽街が形成されるに至った。また，明治後期から大正期にかけて，ドックは浦賀町における電話やガスの普及においても先導的な役割を果たしており，インフラ整備を通して町の発展を牽引していった。さらに，後述するように，ドックおよび関連する工場は職工をはじめとする労働力を必要とし，農家を含む町民に雇用機会を提供することとなった。

2）地域有力者としての浦賀商人

日露戦争期，浦賀ドックの業績は向上したが，明治38年（1905）に塩が専売化されると，浦賀商人の経営は悪化していった[13]。塩の専売制は，塩の輸入増加・国産塩の過剰生産を受けて国内の製塩業が不振であったところに，日露戦争の軍費を調達する必要が加わったために施行された。これは，塩の生産・流通・販売に関わる業者に影響を与えたが，塩問屋を営んでいた西浦賀商人も大きな打撃を受けた。

浦賀ドックの設立に貢献した臼井儀兵衛の経営も悪化した。儀兵衛は浦賀銀行を設立し，重役には西浦賀の商人である宮井清左衛門・高橋勝七・三次六兵衛・穴沢与十郎が就任していた。しかし，儀兵衛の経営悪化を受けて，浦賀銀行は明治39年（1906）に倒産し，浦賀商家の一部は廃業や他出を余儀なくされた。その一方で，西浦賀の塩問屋宮井家は，町内の他の塩問屋への塩の販売や浦賀ドック向けのセメントの輸送を開始して経営を多角化し，東浦賀の米穀問屋美川家は鉄道輸送を利用した新たな流通ルートに対応するなど，経営を維持・拡大する商家も存在した[14]。

そして，明治39年の不況の後も浦賀に残存した商家の一部は，大正期には会社へと経営形態を転換させていった。大正6年（1917）の『神奈川県三浦郡勢一班[15]』（以下，『郡勢一班』）によると，三浦郡内に所在する会社27社のうち，11社の所在地が浦賀町に集中しており，浦賀町が三浦郡の経済において中心的な役割を果たしていたことがうかがえる（第1表）。また，浦賀町所在の会社を他町村所在の会社と比較すると，経営規模の大きな株式会社のほかに，米・塩・酒の販売業や味噌醸造業を営む，中堅規模の合名会社・合資会社が多くみられることが特徴的である。浦賀ドックの設立後の商工業の発達にともない，浦賀町には銀行業・金融業の会社・支店が設置されるとともに，近世以来の商家が合資会社・合名会社へと転換し，経営が維持されていたのである[16]。

さらに，これらの商家は町における有力者としての性格も有していた。たとえば，第1表にみえる三次商店を経営していた三次六兵衛は，近世以来の米穀・酒類・食塩問屋であり，先述のように浦賀ドックの株主でもあったが，明治22年から同24年にかけて初代浦賀町長を務めていた。このように，近世以来の商家の一部は，明治期・大正期において浦賀町の政治的・経済的な有力者となっていった。これらの商家が浦賀町・三浦郡の農業振興にも関わっていくこととなる。

3）浦賀町の農地と農会

商工業の町としての性格が強い浦賀町において，農業はどのように展開していたのであろうか。加藤・千鳥[17]によると，近世には浦賀湾に沿った宮下町や紺屋町（第2図）を中心に商家が軒を連ねており，その後背地である高坂や荒巻（第2図）の台地が畑として利用されていた。また，吉井の山林は幕府の御林とされていた。

さて，近代における浦賀農業について考察するために，大正初期における浦賀町の土地利用状況をみてみよう。第3図は，先述の『郡勢一班』から，大正6年における三浦郡各町村の土地利用状況および農会経費を示したものである。浦賀町の

第1表　三浦郡における会社・銀行の所在地と業種
－大正6年（1917）－

所在	名称	形態	業種	資本金または出資金（円）
浦賀町	浦賀信託	株式	金銭貸付業	60,000
	浦賀瓦斯製造	株式	瓦斯製造販売	50,000
	浦賀介立社	株式	金銭貸付業	30,000
	三次商店	合名	米穀酒類販売・荷物運送等	30,000
	美川商店	合名	米穀酒類販売	20,000
	米塩委託	合資	米塩雑穀販売	20,000
	雑貨屋呉服店	合名	呉服・太物販売	15,000
	浦賀燃料	株式	燃料販売	10,000
	長島味噌醸造所	合資	味噌製造販売	9,000
	桜井商店	合資	米・薪炭・味噌販売	700
	関東銀行浦賀支店	株式（支）	銀行一般の業務	—
田浦町	戸塚銀行船越支店	株式（支）	銀行一般の業務	300,000
	三浦勧業商会	合資	無尽	10,000
	浦郷介託社	合資	仲介業	6,000
	船越青物市場	—	蔬菜果実類仲介販売	5,000
葉山村	鎌倉銀行葉山支店	株式（支）	—	—
	鈴木商店	合資	—	—
	日本実業葉山支店	合資	—	—
逗子町	湘南自動車	株式	—	100,000
	逗子電灯	株式	—	52,500
	逗子勧業	合資	金属貸付及無尽業	10,000
	河原呉服店	—	呉服・太物販売	3,000
	鎌倉銀行逗子支店	株式（支）	—	—
三崎町	関東銀行三崎支店	株式（支）	銀行業	—
	帝国電燈	株式（営）	電燈・電力供給販売	30,000
	三浦共立運輸	株式	旅客・貨物の運送	—
長井村	関東銀行長井支店	株式（支）	銀行一般の業務	—

（『神奈川県三浦郡勢一班』により作成）

注）株式：株式会社　合名：合名会社　合資：合資会社
（支）：支店　（営）：営業所

総面積は計6,899反であり，地目別割合は山林47％・畑27％・田13％・宅地11％である。土地利用状況を三浦郡の他町村と比較すると，田・畑・山林の面積はすべて13町村の平均値を下回っており，耕地面積の少なさが指摘できる。ただし，畑の面積は13町村中6番目に大きく，町自体の面積の小ささを考慮すると，比較的多かったといえる。

一方で，宅地面積に関しては，浦賀町は13町村のなかで最も大きい値を示している。先述した浦賀ドックの開設にともない，宅地が増加していたことが統計的にも確認できる。これに加え，明治10年代から30年代にかけて，横須賀の軍港化にともない，町内の千代ヶ崎・観音台・川間・走水・大津の各所が陸軍・海軍関連施設の用地として接収されていた[18]。軍による接収は直接的な対象となる土地に限らず，その周辺地域にも影響を及ぼすものであった。たとえば，山林の買収が決定した場合，そのなかに用水の水源を有する田も手放さざるをえなかった[19]。このような背景もあり，

浦賀町の耕地面積は三浦郡の町村のなかで少なかったといえる。

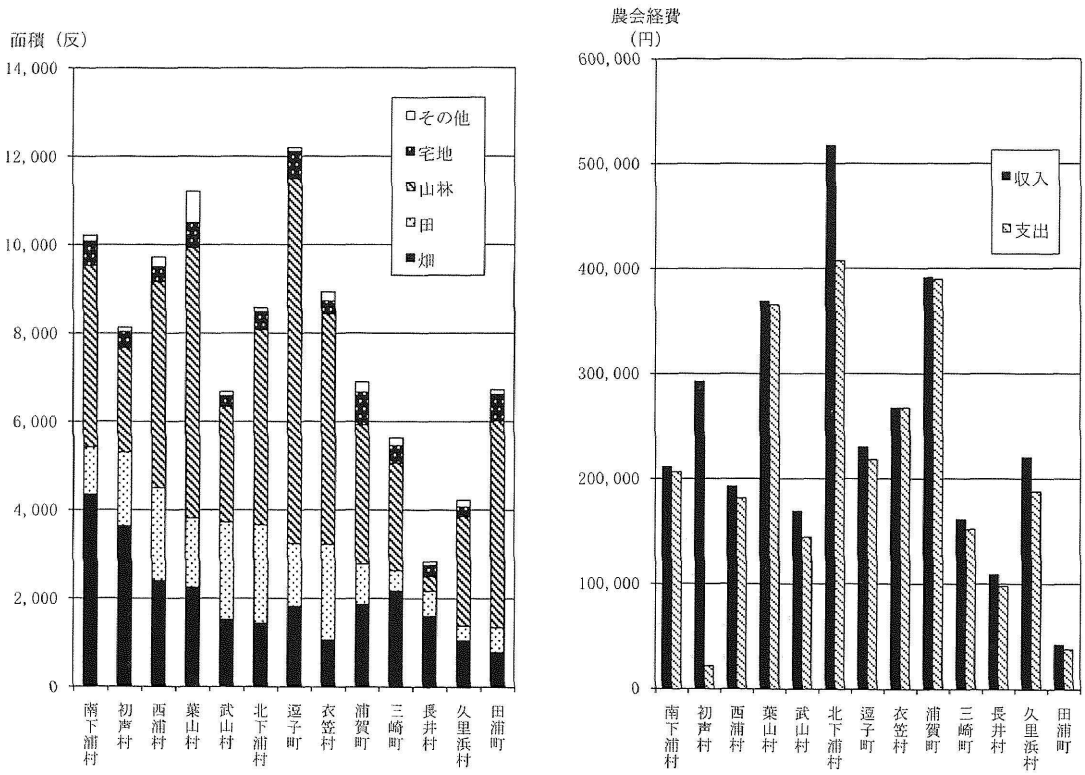
しかしながら，第３図に示した各町村の農会経費を比較すると，浦賀町の経費は北下浦村に次いで多額である。耕地面積は少ないものの，浦賀町は三浦郡の他町村と同程度もしくはそれを上回る農会費用を投じて，農業振興に取り組んでいたのである。農会費用が多額であった具体的な要因については今後検討が必要であるが，背景には，先述した近世以来の地域有力者が農会活動に携わっていたことがあったのではないかと考えられる。

４）浦賀における農業の特色

a. 農間余業と「農村の副業」－近世後期～明治期－

明治３年（1870）の「村高数職業書上[20]」によると，荒巻・高坂・川間の百姓が農間余業として「農間日雇稼」，「農間大工」，「農間菓子小売」，「農間漁業」を行っている。この時点では船番所が機能していることから，「農間日雇稼」には，廻船の荷揚げ作業が含まれていたと考えられる[21]。また，「農間大工」，「農間菓子小売」に関しては，諸藩の穀宿を含む湊周辺の商家の需要があったと思われる。これらの余業は近世後期以来継続して営まれてきたとみてよいであろう。農地が狭隘な浦賀であったが，近世には廻船改めを行う湊町としての労働力・物資の需要を背景として，百姓はこれらの農間余業に従事しながら耕作を行ってきたのである。

さて，明治29年に浦賀ドックが設置された後，農家は農業以外にどのような生業に従事していたのであろうか。明治42年（1909）発行の『神奈川



第３図　三浦郡各町村の土地利用と農会経費－大正６年（1917）－
（『神奈川県三浦郡勢一班』により作成）
注）町村は，田・畑を合わせた面積の大きい順に配列した。

県農会報　第54号[22)]』には，「農村副業表」（以下，「副業表」）と題する，県内各町村における農家の副業の一覧が収録されている。「副業表」1ページに記述された「全県ノ状況」によると，「都会附近の農村」は日傭・出売，「田場所の農村」は藁細工，「畑場所の農村」は養蚕・養豚，「山付の農村」は採薪製材等の山仕事・糸取り・機織り・畜牛，「海付の農村」は漁業を副業としているという。また，多摩川沿岸地方・足柄下郡の沿海地方は柑橘の栽培，都筑郡の北部は柿・栗の栽培，三浦郡および足柄上下の各郡は育馬，愛甲・津久井等の各郡は育牛，さらに，その他の各地において養鶏・養豚を副業としている旨が付記されている。

ここで，三浦郡の特徴として，育馬を副業としていたことが挙げられる。三浦半島の農家においては，近世以来農耕用・運搬用のほか，糞畜として馬が飼育されてきたが，明治期以降は野菜を中心とする農産物や物資の運搬のためにますます多く用いられるようになっていた[23)]。

第2表は，「副業表」2ページ以降に記された県内各町村の副業から，三浦郡各町村における副業を第2表に示したものである。これをみると，三浦郡では浦賀町を含む10町村で山林に関わる仕事が副業とされ，山林からの収入が農業経営を支えていたことが指摘できる。このほか，代表的な副業としては，漁業・藁仕事・野菜の出売りが挙げられる。

浦賀町の場合，山林関係・漁業のほかに，日傭・人足が副業とされていることが特徴的である。よって，浦賀町は，三浦半島中南部のいわゆる「半農半漁村」とは異なり，都市近郊・農村・漁村のすべての性格を併せ持っていたといえる。

また，久里浜村・武山村・長井村において野菜（もしくは蔬菜）の出売が副業とされているが，その販売先は横須賀や浦賀であったと考えられる。浦賀町は周辺地域の農家が出売りに訪れる消費地としての性格も有していたのである。この

第2表　三浦郡各町村における「農村の副業」－明治42年（1909）－

町村名	山林関係	漁業・海草採取	野菜出売	藁仕事等	日傭・人足	その他
浦郷村	—	—	—	—	—	農業（工業が本業）
浦賀町	山林伐木・手入	漁業	—	—	日傭・人足	—
久里浜村	—	—	蔬菜類の出売	—	横須賀・浦賀行人足	—
衣笠村	薪集め・槙切り	—	—	藁仕事	—	—
葉山村	山林植付・伐採薪炭製造	—	—	—	—	—
田越村	山仕事・槙切り	—	—	—	—	—
北下浦村	茅刈・薪切	漁業	—	—	—	春蚕
南下浦村	薪採り・山林の手入	漁業	—	莚織り	—	養豚
三崎町	薪・炭製造	若目採り カジメ藻等の肥料採取	—	莚・縄・藁草履作り	—	—
初声村	薪取	—	—	縄綯・莚織	—	—
武山村	薪の伐採	—	蔬菜の出売・運搬	—	—	—
中西浦村	山掃除・薪採り	—	—	—	—	—
長井村	—	漁業	野菜の出売	—	—	—

（『神奈川県農会報　第54号』により作成）

注）副業の名称については，資料上の表記を変更せずに，6つに分類した。

「副業表」には記されておらず，時期も不明であるが，下浦の農家が浦賀町まで野菜の出売りに赴いており，この際，浦賀町の宅地の下肥を積んで帰って行ったという[24]。下肥の流通関係は，浦賀町が三浦半島の他町村の農業を支える役割を果たしていたことを示す一例といえよう。

さて，都市近郊における農家の副業として，日傭・人足が注目される。先述のように，近世における「日雇稼」には廻船の荷揚げ作業が含まれていたと思われるが，明治後期における日傭・人足の多くは，浦賀ドックおよび関連業種への雇用であったと考えられる。農家構成員の工業従事者としての雇用は，日傭に限らず，正規の工員としても行われていた。このような農家は，大正期以降，統計的には兼業農家として把握されるに至る。

b.「専業農家」と「兼業農家」－大正期・昭和戦前期－

大正期から昭和期において，浦賀町で展開した農業の特色として注目すべきは，専業農家数に対する兼業農家数の多さである。大正４年（1915）に刊行された『浦賀案内記[25]』には，浦賀町の農業について次のように記されている。

> 当町に於いて，農業に従ふものは全戸数の約四分の一を占むれども，多くは兼業にして，専業者は十分一にも足らず。而して田百六十五町六段三畝，畑二百二十四町七段四畝の区域内にて行はる。作物としては特記すべきものなし。例の如くに田に稲，畑に菽麦，其他四時の蔬菜を栽培して，日常の需用に供するのみ

上記では，全戸数の４分の１を占める農家のうち専業農家は10分の１にすぎず，農家のほとんどが兼業農家であるという。さらに，米・麦・豆などの作物のほかは季節の蔬菜類を栽培し，それらは「日常の需用に供するのみ」であった。つまり大量生産による市場出荷は行われていないということが述べられている。

また，大正６年（1917）における三浦郡内の農家数を見ると，農家数7,121戸のうち専業農家4,232戸（59.4％），兼業農家2,889戸（40.6％）であった[26]。これに対して，年代はやや下るものの，昭和13年（1938）の浦賀町内における農家数は専業農家戸数97戸に対して兼業農家戸数が815戸と大幅に上回っている。815戸のうち，715戸は農業以外を主とする兼業農家であった[27]。上記にみた大正６年（1917）の三浦郡内における専業農家戸数・兼業農家戸数の構成と比較すると，浦賀町内の農家に占める兼業農家の多さは特徴的といえよう。

では，具体的にはどのような兼業が行われていたのであろうか。昭和18～19年（1943～1944）の「高坂町内会世帯調査票[28]」（以下「調査票」）からみていくこととしたい。先述のように，高坂は浦賀町内の宮下町・紺屋町・谷戸町など浦賀湾沿いの町場の後背地であり，比較的田畑が多い土地であった。なお，昭和18年４月に浦賀町は横須賀市と合併しており，「調査票」は横須賀市のもとで作成されたものである。「調査票」には120戸が記されており，世帯主は工業従事者（46％）が最も多い。次いで，軍人（11％）・職人（８％）・農業（５％）への従事者が多くなっている。また120戸のうち，農業従事者が含まれる家は11戸であり，そのうち専業農家は４戸であった。

さて，ここでは「調査票」のなかから個別農家の事例を検討する。まず，Ａ家は40歳代の夫婦と１歳から12歳の子どもが４人の６人家族であり，「世帯主」と「妻」の職業欄は「農業夫」である。夫婦の他に就業者はおらず，Ａ家は専業農家に分類できる。

これに対して，兼業農家Ｂ家は，50歳代の夫と40歳代の妻，そして子どもとその家族を合わせて計10人の２世帯家族である。世帯主は50歳代の夫であり，職業は「工員　造船穴あけ」である。妻は「農業」に従事し，子どもと孫は「無し」と「予科練兵」および学生である。つまりＢ家は，世帯主の収入のほか，世帯主の妻が農業に従事する兼業農家であった。

次に，C家は30歳代の夫婦と2歳から13歳までの子どもが4人の6人家族である。夫は「金属溶解工」であり，B家の例と同様，浦賀ドックまたはドック関連産業へ従事していたと考えられる。妻の職業は「農夫」とされているが，ここで示される「農夫」，「農業夫」が自家で農業経営をしていることを指すのか，あるいは専業農家宅へ手伝いに行っていることを指すのかは判然としない。ただ，「兼業」の一つのあり方として，浦賀ドックもしくはその関連工場で夫が働き，妻が専業農家へ手伝いに出るということは珍しいことではなかった[29]。浦賀町における兼業農家の一つの特徴として指摘できるのは，浦賀ドックや関連工場との兼業であるといえよう。

以上から，浦賀町内における農業経営としては，①専業農家，②一家の主たる労働力が農業以外の職に就き，妻が自家で農業を行う兼業農家，③一家の主たる労働力が農業以外の職に就き，妻が専業農家へ手伝いに出る兼業農家，というものが考えられる。本節の冒頭であげた統計が，どのような形態を「兼業農家」としたのかは明らかではないが，②③の形態が①の専業農家の戸数を大幅に上回っていたことが示されているといえよう。特に高坂では，②③の形態をとる7戸のうち，夫が「左官」である一戸を除く6戸すべてにおいて，主たる労働力であった夫や子どもは工業従事者であった。

以上のように，三浦半島の他町村と比較して農地の狭隘な浦賀町において，農業経営は，おもに工業との兼業によって維持されており，農業と商工業が相互依存的に成立していた。

Ⅲ　農会の設立と浦賀町

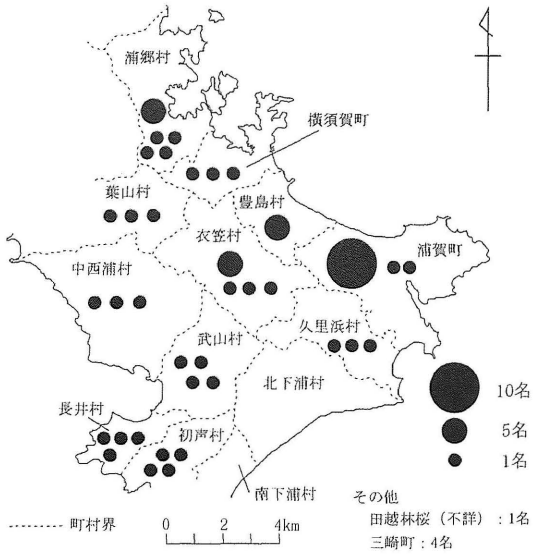
1）農会の設立基盤

近代の三浦郡および浦賀町における農業の展開において，指導的役割を果たしたのは農会であった。そこで，ここでは三浦郡農会・浦賀町農会と浦賀町との関わりについて検討していく。

法定団体としての農会が全国的規模で設立されるようになったのは，農会法が制定された明治32年（1899）からである。浦賀町農会が設立された明確な年代は明らかではないが，明治29年（1896）5月20日付けで「浦賀町農会長」から白井太朗宛に，三浦郡農会第一回総会開催に関する通知が出されている[30]。白井太朗は当該期の町会議員であり，三浦郡農会役員であった人物である。この通知から，三浦郡農会と浦賀町農会ともに，明治29年5月にはすでに設立されていたことがわかる。

さて，上記のような郡農会・町農会が設立される基盤として，明治初期からみられる三浦郡内の篤農家の活動や，明治27年（1894）の三浦同盟会結成といった郡内の動向が注目される。三浦同盟会とは，「専ラ地方的利益ノ増進を討議シ，会員相互ニ親睦交和スル」ことを目的として結成された団体である。「三浦同盟会々則」では，同会の組織として「農事研究部」「商事研究部」「工事研究部」「水産研究部」が置かれ，各産業の「振張ヲ図」るとされている[31]。また明治28年（1895）10月17日の『毎日新聞』では，三浦同盟会は「神奈川県三浦郡の名望家六十余名の発起に係る」ものであり，「専ら実業の振興と会員の親睦」を目的とし，「其会員も追々増加しつゝあ」るという状況が報じられた[32]。

第4図は，同盟会発起人計64名について，史料上にみられる出身町村ごとの人数を示したものである。浦賀町からの発起人は12名と最も多い。その氏名・職業および主な職歴をみると，彼らは近世以来の有力商家・農家であり，明治期から大正初期にかけて浦賀町長や町会議員・県議会議員を務めた者が多い。すなわち彼らは，町政や町内の教育に従事する「名望家」であった。12名のなかに，有力商家だけではなく，以後三浦郡農会・浦賀町農会に深く関わっていく篤農家「白井太朗」の名が見られることは注目されよう。三浦同盟会の設立目的を反映して，浦賀町内の発起人構成もまた，各産業の「振張ヲ図」るという性格をもっていたのである。こうした側面からは，従来言及されてきたような，近世以来の干鰯流通を中心と



第４図　三浦同盟会発起人の町村別分布
（『新横須賀市史　資料編　近現代Ⅰ』198～199，『新横須賀市史　資料編近現代Ⅰ』付録の「三新法体制期の現横須賀市域内の町村区画」および「横須賀市行政区画変遷図」により作成）

した港町・流通の結節点としての性格だけではなく，生産地としての浦賀町の一面をうかがうことができる。

以上のような，三浦同盟会の設立や同会の浦賀町内における発起人構成は，当該期の三浦郡や浦賀町において，農・商・工・水を含めた産業振興を議論する基盤が存在したことを示している。また，こうした郡内における殖産政策への積極的動向は，すでに明治初頭からみられていた。明治７年（1874）には神奈川県の殖産奨励策にともない，郡内の区長や戸長らが中心となって牧畜会社設立の建議が行われ[33]，牝牛貸付も実施された[34]。この牧畜会社設立建議には14名の署名があり，そのうち若命信義（第14区区長）・石渡養泰（第15区２番組戸長）・高橋勝七（同３番組戸長）は，三浦同盟会の発起人ともなった人物である。以上のような三浦郡内有力者や，彼らを中心に展開する農業振興への活動は，後の農会設立と運営の基盤になったと考えられる。

２）三浦興産会の設立とその活動

a. 三浦興産会の設立

地域有力者による農業振興の一例として，明治38年（1905）の三浦興産会（以下，興産会とする）の設立が挙げられる。これは，三浦郡農会が中心となり，産業組合法に基づく有限責任販売購買組合として組織された[35]。設立目的は，農産物の販売・購買の円滑化と，三浦郡各町村の農家への農具等の各種必需品の供給であった。また，横須賀市佐野に設置された興産会の会館は郡・市農産物の市場として利用され，農産物の横須賀市内への供給および市外への移出が行われるとともに，春・秋の年２回開催された三浦郡の農産物品評会の会場とされた。興産会は，農会の活動のうち，農産物の流通や農業技術の普及・発展を下支えした組織であるといえよう。

さて，興産会設立を主導したのは，横須賀市農会長を務めていた石渡坦豊（いしわたやすとよ）である。石渡家は近世以来農業を営んできた家であるが，坦豊は明治26年（1893）に私設の農事試験場を開いており，明治34年（1901）の農会法施行以前から近代的な農業技術の導入に関心を抱いていた。農会の設置後，坦豊は横須賀市農会長のほか，神奈川県農会議員・県農会評議員を歴任し，「県農会の二元老」の一人として，三浦半島における農業の発展に尽力した[36]。

興産会の組合員の職業別人数は，明治42年（1909）度・43年（1910）度は農業447名・官吏10名・公吏３名・雑業３名の計476名，明治44年（1911）度には農業従事者のみ50名増加して計526名であった。明治44年には，興産会による郡内農家の組織化の動きが強まったと考えられる。また，組合員は農家を主体としていたが，官吏・公吏も加入しており，このなかに農会活動を支えた地域有力者も含まれていたと考えられる。

ここで，興産会と浦賀町との関わりをみる上で指摘しておきたいのが，明治43年度・44年度において，興産会の理事を高橋勝七・伊藤匡義・小林章司の３名が，監事を石渡真三郎・石渡義の２名が務めていたことである[37]。このうち，高橋勝七

および石渡真三郎は，明治20年代～30年代に浦賀町長を務めた者であった（第３表）。また，第Ⅳ章で詳述する浦賀町の農家である白井家の文書には，興産会の第３年度（明治43年度）・第４年度（同44年度）の興産会の事業報告が収録されている（以下，『43年度報告』・『44年度報告』）。このことから，浦賀町の有力者が役員として興産会の中核に位置していたことにとともに，浦賀町の有力農家が組合員の一人として興産会の活動に携わっていたことが明らかである。

b. 明治43年・44年における興産会の活動

ここでは，『43年度報告』・『44年度報告』に基づき，興産会の活動を具体的にみていきたい。この両年の事業は，主に①糧秣の陸軍への納入，②陸軍施設からの人糞・馬糞の払い下げ，③蔬菜の陸軍への納入と一般商人への販売，④農事視察であった。

はじめに，①糧秣の陸軍への納入についてみてみよう。興産会が取り扱っていた，大麦・干草・麩の一部は陸軍へ糧秣として納入されていた。特に，大麦は興産会の取扱品として最も重要とされていた。しかし，明治43年度には陸軍の馬糧として北海道産燕麦の納入が増加したため，興産会からの大麦納入は減少していた。翌明治44年になると，北海道産燕麦の品質不良により，大麦の納入量が増加した。三浦郡が陸軍施設の後背地でありながら，馬糧のシェアをめぐって北海道と対抗関

第３表　浦賀町に在住する三浦同盟会発起人の業種および主要経歴

氏名	所在	業種	浦賀町長就任年	その他町政
石渡真三郎	大津	酒類商及醤油 ■薪炭金銭貸付業	明治24年	第15大区３番組大津村旧副戸長 学務委員 町会議員（明治22年）
臼井儀兵衛	紺屋町	米穀商 肥料商運送業	—	町会議員（明治22年）
宮井清左衛門	紺屋町	酒類商及醤油 酢醤油米穀塩商	明治27年	学校世話掛（明治４年）
太田又四郎	紺屋町	米穀商・雑穀塩商 回漕業及運送	明治36年	西岸学校世話役（明治10年） 町会議員（明治22年）
三次六兵衛	谷戸町	米穀商 酒肥料塩商運送業	明治22年	学校世話役（明治10年）
増田太兵衛	田中町	酒類商及醤油 米塩醤油卸商	—	不詳
穴沢与十郎	宮下町	米穀商 味噌塩商	—	学務委員 県会議員 郡会議員 町会議員（明治22年）
高橋勝七	鴨居	米穀商 酒荒物商	明治32年	神奈川県第15区三番組戸長 浦賀町会議員（明治31年，37年，43年，大正２年）
角井市郎左衛門	吉井	農家	—	町会議員（明治22年）
白井太朗	高坂	農家	—	町会議員（明治22年）
青木四郎左衛門	不明	不明	—	町会議員（明治22年）
木村嘉兵衛	不明	不明	—	第15区３番組鴨居村旧副戸長 町会議員（明治22年）

（『浦賀案内記』，『新横須賀市史　資料編　近現代Ⅰ』，「大日本商工人名録」により作成）

注１）業種が不明の場合は「不明」，町政との関係性が不詳の場合は「不詳」，町長就任がない場合は「—」で示した。

注２）町会議員は浦賀町を指す。

注３）判読不明文字は■で示した。本稿では以下同様とする。

係にあり，馬糧供給地として確立されていなかったことがうかがえる。

また，干草については，「従来郡内ノ生産甚ダ僅少」であったが，陸軍糧秣本廠等の要請を受けて農家に「種々ノ勧誘」を試みたところ，「予定ノ数量」には達しなかったものの，明治44年には「前年ニ比シ著シク増加」した。陸軍の要請によって組合農家の生産品が規定されていったことがうかがえる。

続いて，②陸軍施設からの人糞・馬糞の払い下げについてみてみよう。明治43年には武山往還改修のためにこれらの運搬が困難であり，「規約ヲ実行セザル者」が多く，「搬出停滞シ聯隊ニ迷惑ヲ及ホシ」という状況であった。しかし，明治44年に往還の改修が終了すると，「好況ヲ呈」した。なお，石渡坦豊は，明治40年（1907）に横須賀市農会・三浦郡農会による海軍関係施設の屎尿払い下げを開始し，明治43年には横須賀肥料合資会社を設立していた[38]。これと同時期に，興産会の組合員が陸軍施設の屎尿・馬糞の払い下げを請け負っていたのである。

最後に，③蔬菜の陸軍への納入と一般商人への販売について考察する。陸軍への納入は明治42年度（1909）には重砲兵第一聯隊のみであったが，「組合員諸氏ノ精励ノ結果」，43年度には第二聯隊にも納入するようになった。そして，44年度には「両聯隊ノ殆ンド全部」への納入が確立しつつあったが，蔬菜の「品質稍ヤ劣」るとして，陸軍より注意を受けており，「屢々組合員ニ警告ヲ促」すという状況であった。この時点で，陸軍納入のシェアは確保したものの，品質の高い蔬菜を安定的に供給することが必要とされていた。

一方で，蔬菜の一般販売は，明治43年度は「昨年度ニ比シ更ラニ進歩ノ状ナク，返テ売上金額ニ減少」をみるという状況であった。そのため，明治44年度に暴風の被害を受けたことを機に，販売を中止している。一般への販売高が増加しない原因としては，「現金主義ノ実行」が困難であり，売掛金が増加していることが記されている。興産会としては，蔬菜の一般商人への販売を志向しつつも，即金販売が定着していなかったため，安定的な販売を行うことができなかったといえよう。

最後に，④農事視察について簡単に触れておく。蔬菜・果樹の栽培や生産品販売における「荷作ノ巧拙」については「先進地方」を視察することが有益であるとされ，明治43年に監事石渡義と組合員２名によって，群馬県豊田町・下仁田と「東京附近ノ蔬菜多町」および千住の野菜市場の視察が行われた。ここでは蔬菜・果樹栽培の方法はもちろん，東京近郊で蔬菜を栽培している町や千住市場が視察されていることから，良質な蔬菜を生産するとともに，陸軍への納入にとどまらず，三浦郡から都市部へ出荷することを志向していたと考えられる。

ここで注目すべきであるのが，興産会の監事自らが視察に赴いていることである。後述するように，三浦郡農会では，明治30年代以降，各町村の篤農家十数名による農事視察が行われていた。これと平行して，三浦郡の有力者３名から５名程度による視察も行われている。三浦郡の産業を牽引する有力者自らが，農業の発展に強い関心を持っていたことが明らかである。

以上のように，興産会は主に陸軍と結びつきつつ，組合員に対し，品質の高い蔬菜や糧秣を生産することを要請した。従来指摘されていた海軍の需要に加えて，陸軍の需要も三浦郡における蔬菜栽培発展の一契機となったと考えられる。しかしながら，蔬菜の一般商人への安定的な販売は困難であった。したがって，明治44年の段階で，郡内における農産物の円滑な販売・購買という興産会の設立目的は達成されていなかったのである。次節で述べるような，農会による栽培奨励作物の決定は，このような背景において実施されたと考えられる。

３）農会による蔬菜栽培奨励と浦賀町

地域有力者やその結合を一つの背景として結成された浦賀町農会は，どのような活動を展開していったのであろうか。大正末期から昭和戦前期の農業に関しては第Ⅴ章で述べるが，その前提とし

ての蔬菜栽培奨励に着目し，明治末期の農会活動をみていくこととしたい。

三浦郡農会による蔬菜栽培奨励自体は，郡農会設立直後から行われていた[39]。次に挙げる史料は，明治44年３月３日の日付が付された，三浦郡農会による「三浦郡内蔬菜栽培区域予定表」（以下「栽培区域予定表」）である[40]。これは「浦農通知綴」と題され，浦賀町農会から役員へ配布されたと思われるビラや，白井太朗宛に出された三浦郡農会長らによる書簡等と一綴りにされているものである。「栽培区域予定表」の冒頭において，三浦郡農会は当該期の郡内における蔬菜栽培に関して次のように述べている。

> 本郡ノ農業産物就中蔬菜ハ従来過渡ノ時代ニ展開セシ為トハ云ヒ，其生産区々ニシテ或二三ノモノヲ除キテハ大ニ顧客ヲ違フルコト能ハサルノアルハ最モ遺憾トスル所ナリ，依テ本会ハ蔬菜栽培予定表を作リ，更ニ当業者諸君ノ意見ヲ徴シテ郡内蔬菜栽培ノ分布ヲ限定シ，以テ従来ノ欠陥ヲ補ヒ，自他ノ利益ヲシテ益々■大ナラシメンコトヲ期ス，

上記ではまず，三浦郡における蔬菜栽培は「過渡期ノ時代に展開」したものであるということ，またその生産は地域ごとの特産物となっておらず，顧客との安定的な需給関係が確立していない様子が述べられている。そこで三浦郡農会は，「郡内蔬菜栽培ノ分布ヲ限定」することを打ち出し，各町村が重点的に栽培すべき作物を提示したのである。第４表は，「栽培区域予定表」で挙げられた字ごとの栽培奨励作物と，明治27年（1894）時点で浦賀町内において栽培されていた農産物との対応を示したものである。

第４表における作物の種類に着目すると，まず郡農会によって奨励された農作物と，明治27年時点で栽培されていた農作物とは共通するものが多いことがわかる。このことから，農会設立前の浦賀町の農家では，同44年に郡農会から奨励されるような蔬菜類の栽培は行なわれていたものの，生産量が少なく，また販路も未確立であったということが考えられる[41]。そうであるがゆえに，「大ニ顧客ヲ違フルコト能ハサルノアルハ最モ遺憾トスル所ナリ」として生産・流通・消費を円滑化し，需供関係の確立を目指していたのである。

栽培奨励作物としては，大根・蕪・ゴボウ・甘藷・小松菜・豆類など，日常的に消費される野菜類が挙げられている。いずれも農家の自給用となると同時に，浦賀町内や近郊の消費地からも大きな需要があったと思われる。なお，久里浜や下浦地域で奨励されている瓜類は，浦賀町の栽培奨励品目にはみられない。明治末期の浦賀町における農業は，浦賀ドックや横須賀市場に近接し，町内外に大きな需要を抱えた近郊農業としての可能性が展望されていたと考えられる。

ところで，「栽培区域予定表」の策定と同年に，浦賀町農会は蜜柑栽培と苗木の共同購入を試みている。共同購入の過程では，三浦郡農会役員である白井太朗を通じて「附近ノ諸氏」への通知が行われた[42]。こうした果樹栽培奨励は，明治末期の奨励策を素地として大正期から昭和期にかけても継続されたのである。それは郡農会・町農会に加えて，三浦興産会や大正14年（1925）に結成された三浦郡蔬菜出荷組合連合会などによって推進されたものでもあった[43]。昭和10年（1935）には「最近農会を主として果樹園の奨励に全力を尽した関係もあって，ブドー蜜柑柿の栽培も漸次改良進歩の蹟歴然たるものあるも，尚積極的奨励をなすべく町自体乗り出すことになり[44]」とされるに至るのである。

４）三浦郡農会・浦賀町農会による農事視察

写真１は，明治34年に石渡坦豊らが千葉県への農事視察に赴いた際，木更津にて撮影された記念写真である。視察の参加者は，坦豊のほか，石渡萬吉（浦賀町大津）・小川清八（久里浜）・鈴木幸次郎（葉山）・高梨栄造（葉山）・鈴木盛太郎（武山）であった。この６名は，いずれも三浦郡を代表する篤農家であった。

この視察の際，坦豊はモーニングに山高帽・縞

第４表　「栽培区域予定表」にみる三浦郡の町村別栽培奨励作物－明治44年（1911）－

栽培奨励作物名	明治27年	浦賀	浦郷	久里浜	衣笠	葉山	田越	北下浦	南下浦	三崎	初聲	長井	武山	中西浦
大根		●	▲	▲		▲	▲	●	●	●	●	●	●	▲
蕪菁	○	▲		●		▲		▲				▲	●	▲
胡蘿蔔（ニンジン）	○	▲		▲			▲	●	▲		●	●	▲	
牛蒡	○	▲			▲			●			●	●	▲	
甘薯	○	▲	▲	●			●	●	●	●	●	●	●	
瓜哇薯（ジャガイモ）			▲				●	▲	●	●	●	▲	▲	
里芋	○	●	▲	▲			▲	●	●	●	●	●	●	
蓮根			●	▲									▲	
慈姑（クワイ）				▲	▲	▲								▲
薤（ニラ）				▲				▲	▲					
葱頭		●	▲	▲	●	●	●						▲	●
甘藍類（キャベツ）	○	●	▲	▲	▲	●	▲						●	●
■当■		●				▲					▲			
葱	○	▲		●	▲	●	●			▲	▲	▲	●	●
菘菜類		●	▲	●	▲	▲	●		▲			▲	▲	▲
京菜・小松菜	○	▲	▲	●	▲	▲	▲			▲	●	▲	●	▲
野蜀葵（ミツバ）		●		▲								●	▲	
■荷		●		▲	▲									▲
胡瓜	○		▲	●			●		▲	▲	●	▲	▲	
西瓜				●					●	▲	●			
甜瓜（メロン）				●					▲	▲	●			
越瓜・葵瓜（マクワウリ）類	○			●					▲	▲	●	▲	▲	
南瓜				●			▲	▲	▲	●	●	▲		
茄	○	▲	▲	●	▲	▲	●	▲	▲	●	●	▲	●	▲
豌豆	○		▲		※	※	▲							●
蠶豆	○	▲	▲		※	▲	▲							▲
茶豆		●	▲		※	▲							▲	▲
枝大豆		▲			●	●	▲	▲					●	▲
薑	○	▲			▲	●						▲	▲	
蕃椒（トウガラシ）	○											●	▲	
玉蜀黍（トウモロコシ）								●	●	※				

（『浦賀町郷土誌　全』および白井竜太郎家文書，「浦農通知綴」横須賀市史編さん室提供により作成）

注１）『浦賀町郷土誌　全』によれば，○を付した農作物のほか、明治27年の段階では以下の作物も栽培されていた。水稲・陸稲・大麦・小麦・大豆・小豆・ささげ・粟・蕎麦・菜豆・蘿蔔・芹菜・大芹菜・コンニャク・菠薐草（ホウレンソウ）・結球山東白菜・三河島菜・白莖・青莖・朝鮮白菜・欵冬。

注２）「明治期27年」欄の○は，明治27年の浦賀町内における栽培作物に該当するものを指す。

注３）●：最重要物として栽培奨励がなされている農作物。

注４）▲：注３）に次ぐ重要物として栽培奨励がなされている農作物。

注５）※：史料中において注３）と注４）の表記が判別困難なもの。

注６）農作物名は史料中における表記にしたがった。

ズボンに脚絆・草履履きという服装に首から双眼鏡をかけ，さらに「大時代がゝつた洋傘」を杖にしており，「明治の膝栗毛とも言ふ様な物凄い格構」であった。しかしながら，「モーニングが村の有力者たることを示したのか，何処へ行っても大いに歓待されたらしく視察大いに得るところあ

つた」と記されている[45]。明治30年代から大正初期には，先進地域から栽培法を導入するために，上記のような三浦郡有力者数名による視察のほか，農会の主催による農事視察が盛んに行われていた。第５図は，明治34年から大正５年にかけて実施された，興産会・三浦郡農会・郡内各町村農会主催の農事視察のうち，関東地方における視察について，視察先と視察事項を示したものである。

視察は，各町村の篤農家および農会役員の計12名から20名前後で行われることが多かった。視察内容は，各地の篤農家のもとで推進されていた蔬菜栽培・苗木養成・家畜飼育の見学のほか，農事試験場・農林学校・品評会の見学など，多岐にわたっている。直接的な農業技術の導入にとどまらず，農会の活動や農業教育を含む農業振興のあり方を見学しており，三浦郡の農業の発展に生かそうとしていることが注目できる。

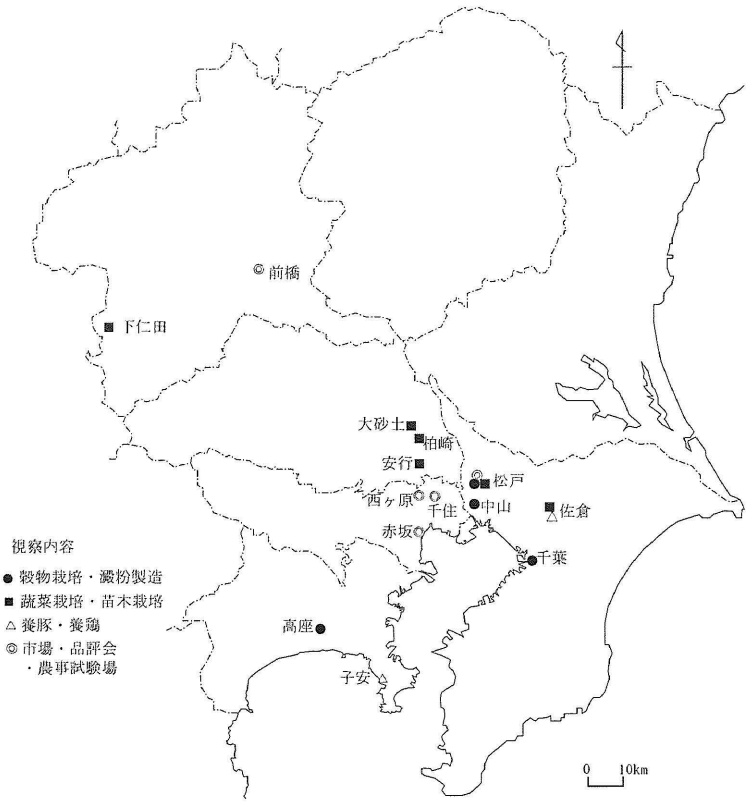
写真１　石渡坦豊らによる千葉県への農事視察
－明治34年（1901）－
（横須賀市立図書館所蔵『石渡坦豊傳』，93ページより転載）
注）前列左から石渡萬吉・石渡坦豊・小川清八。
後列中央が高梨栄造・後列右が鈴木盛太郎。

これらの視察地域は，東京近郊や東京への出荷を行っている地域が多い。なお，明治43年には，郡農会の主催のもと，篤農家12名が愛知県において農林学校や農事試験場・果樹園・名古屋コーチンの養鶏等を視察しているが，当該期の愛知県においては，鉄道を利用した名古屋市および大阪・東京・兵庫など各地への農作物の出荷が盛んになっていた[46]。視察先の各地において，市場や出荷方法（荷作り等）を見学していることからも，三浦郡農会は，東京などの都市部への鉄道を用いた出荷を志向していたと考えられる。

ここでは，詳細な報告書[47]が残されている大正５年の三浦郡農会第22回農事視察について，具体的にみていきたい。この視察では，10月27日より５日間の日程で，東京・千葉・埼玉・神奈川を訪れている。参加者は，三浦郡農会評議員川島平蔵と三浦郡農会技手川北不二雄ほか，郡内各町村の篤農家12名の計14名であった。12名の内訳は，田浦町・久里浜村・衣笠村・葉山村・北下浦村・三崎町・初声村・長井村・武山村からは１名ずつであったが，浦賀町のみ白井太朗（高坂）と青木唯治（鴨居）の２名が参加している。浦賀町の篤農家の農業への関心の高さがうかがえる。

報告書には，視察内容が図とともに詳細に記されている。ここでは，次の３点の記述に注目したい。

１点目は，初日に訪れた大日本農会主催の農産物品評会の記録である。ここには，浅草清水商店の噴霧器・静岡県各種製茶の品・青森県のりんご・千葉県の梨・埼玉県の柿・山梨県の葡萄など，全国各地の農業先進地域の農産物や農具が出品されていた。「視察報告」では，「各府県当業者ノ丹精ノ結果」を集めたものであるため，「一トシテ批難スルモノナク」と評価されている。そして，三浦郡よりの出品がないことを「嘆ジ」つつも，「産業ノ先覚者タルベキ吾ガ一行ノ得ル所大ナル



第５図　三浦郡農会・浦賀町農会・三浦興産会による農事視察－明治34～大正５年(1901～1916)－
(『新横須賀市史　資料編　近現代Ⅰ』所収「白井竜太郎家文書」，横須賀市自然・人文博物館所蔵白井家文書により作成)
注）白井家文書によって，詳細を明らかにできる視察のみを示したものであり，当該期のすべての視察を網羅するものではない。

ヲ嬉ビ」と記している。大正初期の段階では，三浦郡産の蔬菜の品質が，大日本農会の品評会に出品しうる水準に達していなかったことがうかがえる。そのため，視察参加者は「産業ノ先覚者」を自任しており，三浦郡の農業振興のために，他所の農業技術を導入しようとする強い目的意識がうかがえる。

２点目として，２日目の埼玉県における長薯・慈姑の栽培に関する記述に注目したい。まず，北足立郡大砂土村における長薯栽培については，栽培方法のほかに出荷用の包装方法が図示され，「販路」の項目では神田市場を経て東京市中へ販売されていることが記録されている。その上で，三浦郡での栽培の可能性について，長薯の栽培には腐植質壌土が適するため，「我ガ郡ノ地勢トシテ直ニ以テ之レニ準スル事不可能」としながらも，「一二年生ノ種子用ノモノ」を栽培することは難しくないとし，「吾人栽培上ニ得ル所大ナルヲ喜ビ」と記されている。先進地域を参考にしながら，三浦郡に適する栽培・出荷方法を導入しようとしていたことがうかがえる。続いて，同日見学した南埼玉郡柏崎村における慈姑栽培については，栽培が容易であるとし，「水田ノ排水ニ困却セル本郡ノ或ル地方」のような地で試験的に栽培を行うことは「無益ニ非ザル」と記されている。

３点目として，３日目の千葉県立農事試験場園

芸部を訪れた記録をみてみよう。この試験場は大正2年に中山村より移転しており，「十分ナル試験」を行えていない状況であったが，技師より促成栽培・蔬菜園芸・果樹園芸に関する話を聞き，「一行ノ知識上ニ開発セラレシコト多カリシ」と記されている。

以上のことから，視察に参加した篤農家は自ら先覚者として知識を吸収し，三浦郡に適する栽培方法を導入しようとしており，将来的には都市部への出荷を企図していたと考えられる。そして，「視察報告」の結語として，次のように記述されている。

> 今回ノ農事視察ハ僅カニ五日間ノ行程ニシテ尚ホ一府三県ニ亘リ広ク園芸ニ養豚ニ養鶏ニ尚ホ農産製造ニ迄望ヲ及ボシタルヲ以テ得ル所大ナリトハ雖モ，ソノ見ル所，聞ク所，皆人ニ十分ナル徹底ヲ得難サリシヤモ知ルベカラズ，此ニ於テ以上視察セシ所ヲ概説シテ各人ノ見聞ニ依リ長ヲ採リテ事ニ応用スルノ時ニ方リ幾分ノ参考トモナルヲ得バ，吾一行ノ幸ヒトスル所ナリ。

今回の視察では「得ル所」が大きかったが，その成果を各農家に十分に徹底することは難しいとしている。そこで，視察で得た知識を報告書にまとめ，半島内の各農家に普及させることをめざしたのである。視察においては三浦郡に適した農法が模索され，結語にも「各人ノ見聞ニ依リ長ヲ採リテ事ニ応用スル」とあるように，視察によって得られた知識を，各農家がどのように実践していくのかが課題とされた。

そして，この視察の参加者の一人であり，浦賀町において多様な作物の栽培を実践したのが白井太朗であった。次章では，白井家の近世以来の来歴をみた上で，篤農家として近代浦賀の農業にどのような役割を果たしたのか考察したい。

Ⅳ　篤農家白井家と浦賀町・三浦郡

1）近世の白井家

明治期から昭和期において，浦賀町農会・三浦郡農会の中核的存在であった白井太郎左衛門家（以下，白井家）は，近世には西浦賀高坂の名主であった。近世の白井家はどのような農業経営を行い，浦賀町とはどのように関わっていたのであろうか。

『浦賀中興雑記[48]』所収の「西浦賀地名由来之事[49]」によると，文禄3年（1594）の検地の際，「高坂台」の長嶋平十郎・「細田」の白井太郎左衛門を含む計9名が，「都而何事にも不限組合にて懇篤」にしていたとされる。このことから白井家は，近世初期以来の有力な家の一つであったと考えられる。

また，同史料によると，享保5年（1720）に浦賀奉行が設置されたことを機に，同16年（1731）より東浦賀の干鰯問屋石井惣兵衛による入江の埋め立てが行われた。この後は西浦賀に家屋が増し，年代は不明であるが，高坂に隣接する新たな字である田中が形成された。そして，明和8年（1771），高坂のうち，田中と軒続きである「高坂七軒町」（以下「七軒町」と表記）が，田中に編入された。背景には，鎮守明神の祭礼をめぐる「七軒町」と「高坂山手」（高坂のうち「七軒町」以外，以下「山手」と表記）間の対立があったが，この過程において，「七軒町」の者が次のような興味深い主張を行っている。

祭礼の際，「七軒町」は田中とともに附け祭りを出して屋台を作るなどして華美を好んだが，「山手」では費用が嵩むことを理由に，これを好まなかった。そのため，祭礼への出金の割合をめぐる「七軒町」・「山手」間の争論が絶えず，結局「七軒町」は田中に組み入れられることとなったという。ここで「七軒町」は，「山手」に対し，「山間の者と雖田畑宅地山林抔所(ママ)所持せらるゝ故多く割合出金有べし」と主張している。「山手」の者は「山間の者」ではあるが，田畑・宅地・山林を所有しているのであるから，多く出金すべき

だというのである。これは争論の際の主張であるため，必ずしも実態を示したものとはいえない。

しかしながら，「山手」に属していたと思われる白井家には，幕末期の山林についての興味深い記録が2点残されている。1点は「農業日誌[50]」の記述であり，安政6年（1859）における枇杷・桃・柿・蜜柑・菜種・大豆・大麦の売値が書き上げられている。詳細は不明であるが，この時期に，高坂の山林において果樹が栽培されていたのではないかと考えられる。同様の記述は，品目に若干相違はあるものの，安政7年（1860）・元治2年（1865）・明治4年（1871）にもみられる。果樹・穀類を含む作物が，白井家から浦賀商人を通して，浦賀周辺地域あるいは浦賀湊に入港していた廻船に販売されていたのではないかと考えられる。

もう1点の史料は「売上帳」である。この史料には，文久3年（1863）の白井家による穀物・果実・木材の売買の状況や，農作業に関わる雇用関係が記述されている（第5表）。ここから次の3点を指摘したい。1点目は，安政期に引き続き枇杷・桃・柿・蜜柑・大豆が販売され，このうち大豆は田中町の商人と思われる安斎伊兵衛に販売されていることである。2点目は，田の耕作や木材の搬出に際し，吉井からの雇用関係がみられることである。後述するように，白井家は明治期・大正期にも田植えや山林の作業において「手伝人」を雇用している。白井家による農業経営は，近世以来，周辺地域の労働力に支えられて成立していたのである。

3点目は，三浦半島の他地域と関わりつつ，木材の栽培・出荷が行われていたことである。文久3年には，須賀谷より松苗を購入するとともに，この年以前に植え付け・育成がなされていたと思われる松が伐採・出荷されている。出荷に際しては吉井の者2名に「浦賀渡船場出賃銭」が支払われているが，これは山林から木材を浦賀の渡船場まで搬出した賃銭を指す。浦賀湊から船によって木材が移出されていたことが明らかであるが，この年の場合，移出先は明らかではない。

なお，「農業日誌」には，慶応元年（1865）に高坂の「田向ヒ山」から浦賀の渡し場へ搬出された木材について，「出し賃」の支払先および販売先が記録されている。これによると，「出し賃」の支払先は内川新田4名・八幡村1名のほか，居住地不明の2名である。一方，これらの木材の販

第5表　白井家の売上・支払の記録－文久3年（1863）－

売上/支払	月	内訳			取引先	
		品名・雇用内容	数量	金額	所在	氏名
売上	4月～5月	枇杷	2500束	28貫524文	—	—
	5月	大豆	1石7斗1升	19貫900文	田中町	安斎伊兵衛
	5月～6月	桃	33,186個	42貫672文	—	—
	8月	柿	868個	2貫220文	—	—
	9～10月	蜜柑	3升	248文	—	—
	9～11月	大蜜柑	10杯	2両2分と6貫文	—	—
	9～12月	中蜜柑	27樽	7両と8貫400文	—	—
	—	松真木	—	44両3分	—	—
支払	2月	松苗	2,900本	1両2分3朱	須軽谷村	角井小右衛門
	2月	石灰・蛎灰代/左官31人手間賃	—	3両2分2朱	田中町	橋本甚兵衛
	4月	田耕し（牛1匹・人足1人）	—	600文	吉井	角井幸右衛門
	—	雑木・松真木伐採	1,594束	5貫448文	—	長島又右衛門
	—	松真木の浦賀渡船場出賃銭	1,271束	2貫641文	吉井	角井万蔵
	—	松真木の浦賀渡船場出賃銭	3,332束	6貫936文	吉井	長島新右衛門

（横須賀市自然・人文博物館所蔵　白井家文書「売上帳」により作成）

売先には，田中の太平堂（菓子屋）と田中の商人４名のほかに，房州醤油製造所が含まれている。高坂の山林において生産された木材の搬出・販売をめぐり，浦賀町内に限らず，三浦半島内の他地域や房総半島との関わりが形成されていたことが注目されよう。

以上のように，白井家は名主を勤めた近世以来の有力者であったが，幕末期には材木の植え付け・搬出や，大豆・果樹の栽培を行っていた農家であった。これらは，明治期以降の山林経営や果樹栽培の基盤となっていったと考えられる。

２）明治期・大正期の地域有力者としての白井家

明治22年（1889）４月，浦賀町会議員の２級・１級選挙が実施され，白井太朗は１級選挙にて当選した[51]。この際，太朗は当選者12名のなかで７番目の175点を獲得している。最も投票点数の高かった三次六兵衛（186点）をはじめ，当選者には近世以来の有力商家が多いなかで，高坂の農家である白井太朗および角井市郎右衛門（172点）が，商家の宮井清左衛門（105点）・臼井儀兵衛（92点）・太田又四郎（80点）よりも高い点数を獲得していることは注目に値する。

また，同年５月には，浦賀町長および助役の選挙が実施された[52]。白井太朗は双方の候補者となったが，町長選挙では三次六兵衛が18点・白井太朗が１点となり，六兵衛が当選して初代町長となった。そして，続いて行われた助役選挙の結果，白井太朗が17点・石渡真三郎が２点を獲得し，太朗が当選した。太朗は町長選挙では三次六兵衛に敗れているものの，六兵衛のもとで助役を務め，宮井清左衛門らの有力商人とともに町政に携わっていたのである。

続いて，明治44年（1911）から大正６年（1917）の白井家の日記[53]を中心に，太朗の浦賀町・三浦郡有力者との関わりをみていきたい（第６表）。大正２年（1913）１月には「浦賀町紺屋商会所」にて，大正６年３月には「浦賀西岸商人会所」にて浦賀町会議員候補者が決定され，この場に太朗も参加している。大正初期の浦賀町においても，依然として，近世以来の西浦賀の有力商人とともに白井家が政治的な影響力を有していたといえよう。また，太朗は町会議員として町政に携わるとともに，宣戦奉告会・新嘗祭・小学校における紀元節等の町内行事に参加していた。さらに，太朗は浦賀ドックの株主であったことから，ドックと町民との「懇談会」や進水式にも招待されている。大正期には白井家の町の有力者としての立場が確立していたといえよう。

また，太朗は大正３年（1914）11月に，明治35年（1902）に没した初代三浦郡長小川茂周[54]の祈念碑建設に際し寄付金を出し，大正６年１月には横須賀小学校にて開催された三浦郡町村長・学校長・「有志者」約100名の出席する「懇親の新年度会」に出席している。太朗は浦賀町の有力者として，三浦郡を代表する有力者とも親交を有していたのである。

さらに，日記には，三浦郡の地方改良運動と浦賀町との関わりを示す記述がみられる。明治44年２月には大津小学校にて地方改良会三浦郡支部の発会式が行われていた。そして，大正３年３月には浦賀小学校にて三浦郡支部の総会が開かれるとともに，農学博士による「尤有益なる園芸」と題した講演も行われている。地方改良運動と一体となって三浦郡の農業技術の向上がめざされ，浦賀町が活動の拠点の一つとされていたのである。これらが「日記」に記述されていることから，白井太朗も地方改良運動の発会式や講演会に参加していたと考えられる。

以上のように，白井太朗は浦賀町の政治的な有力者であるとともに，三浦郡の有力者との関わりも形成していた。このなかで，三浦郡全体の課題としての農業の振興にも積極的に関わっていったのである。

３）農会役員としての白井家

白井家の日記によると，白井家の当主であった白井太朗は浦賀町農会員・三浦郡農会員として，子の十女雄とともに農会を通じた種苗等の配布・籾種の塩水撰・品評会の開催などの活動に携わっ

第６表　白井太朗と浦賀町・三浦郡有力者との関わり
－明治44年～大正６年（1911～1917）－

年	月日	摘要
明治44	**2/16**	**大津にて三浦郡地方改良会三浦郡支部発会式挙行。**
	3/5	**三浦郡役所にて興産会資金の件・人糞尿払い下げの件につき会談。**
明治45	**1/30**	**武山村役場内にて三浦興産会44年度事業報告。 地方改良会の講話あり。**
大正２	1/13	浦賀町紺屋商会所にて，浦賀町東西両岸の区長会議。町会議員候補者を決定。
	1/15	角井市郎右衛門・白井太朗両人に，町会議員立候補の依頼あり。
大正３	**2/7**	**故三浦郡長小川茂周記念碑の件につき，大津にて相談会（太朗病気のため出席せず）。**
	2/11	浦賀小学校にて紀元節祝賀式挙行，太郎出席。
	3/15	**浦賀小学校にて三浦郡改良会支部総会。特志者表彰式あり。農学博士原ひろし氏講演（「尤有益なる園芸」）あり。**
	9/5	叶神社にて宣戦奉告会。川島平蔵・宮井清一郎・三次六兵衛・白井太朗・長島峰吉らとともに太朗出席。
	9/15	出征軍人出軍中壮健・日本国大勝の祈祷あり。町会議員・氏子総代出席，加藤小兵衛・三次六兵衛・在郷軍人らとともに太朗参加。
	10/31	高坂区長木村福松ら来宅，区長代理を務めるよう太朗に依頼，太朗承諾。
	11/1	出征軍人後援会，町会議員・各字区長出席。
	11/13	**小川茂周の祈念碑の寄付金を出金。**
	11/23	叶神社にて新嘗祭・■隊入営者健全の祈祷あり。町会議員・宮井清一郎・白井太朗ら出席。
	12/5	**小川茂周の祈念碑衣笠に建設，同所にて祭祀式執行（太朗，風邪のため不参加）。**
大正４	1/25	衆議院議員補欠選挙候補者につき浦賀町各字より１・２名ずつ出席。
	3/25	衆議院議員投票につき，太朗・宮井清一郎ら立ち会い。
	9/27	郡会議員候補者決定のため集議。
	10/8	浦賀船渠会社と浦賀町民と懇談会。太朗招待を受けて出席。
	10/29	浦賀小学校御真影奉安式に出席。
大正５	1/5	消防組点検，太朗・郡会議員・町会議員・各字区長出席。
	6/21	町役場内にて町会（ドックにて築地新町・古町買い上げ，道路の件）。
	11/24	新嘗祭執行，町会議員・両岸各字区長参拝，太朗も参拝。
大正６	**1/13**	**横須賀小学校にて懇親の新年度会。三浦郡町村長・学校長・有志者約100名出席，太朗も出席。**
	3/10	浦賀船渠株式会社にて大坂岸本■船会社より依頼の船進水式，太朗招待されて出席。
	3/14	浦賀西岸商人会所にて，浦賀町会議員候補者予定の相談会。
	3/19	**横須賀市佐野の三浦興産会楼上にて，三浦視察員講話会。**
	3/23	商人会所にて，町会議員選挙につき会談。

（白井竜太郎家文書「日記」，「大正三年度日記」，「大正四年度日記」，「大正五年度日記」，「大正六年度日記」，横須賀市史編さん室提供により作成）
注）ゴシックは三浦郡有力者との関わりを示す。

ていた。

ここでは，これらの活動のうち２点に注目したい。１点は，白井家は郡農会が新たに導入を試みた作物の浦賀町内への配布に携わるとともに，自らも配布を受けて播種・植樹を行っていることである。たとえば，明治45年（1912）４月10日には，農会事務所において，白井太朗を含む５名が「籾種配布・樟樹種苗配布之件」について集議しているが，三浦郡農会は明治38年（1905）に「日露交戦記念植樹」として，静岡県田方郡・鎌倉郡より

苗木計16,000本を購入しており，これが郡内の各町村農会と篤農家に配布されていた[55]。この際，白井家も配布を受けたものと思われるが，「農業日誌」によると，白井家は明治41年（1908）4月14日に静岡県田方郡より樟5,000本を購入している。ここには，「樟木樟脳製造ニ付，将来有望之木なり」と記されており，明治38年の苗木配布を契機として，白井家が樟の有用性に着目していたことが確認できる。白井家は明治38～45年頃，農会と関わりつつ，浦賀町における樟の植樹に中心的な役割を果たしていたと考えられる。

また，白井家は農会が奨励した果樹栽培も積極的に行っていた。先述のように，明治44年，白井太朗は町農会による蜜柑苗木の共同購入において中心的な役割を果たしていた。大正4年11月には，実際に農会より柿苗2本・長松柿1本・富有柿1本の配布を受けている[56]。先述したように，白井家は幕末期より蜜柑・柿などの果樹を栽培しており，明治期以降は農会の要請を受けた果樹栽培に対応していったのである。

なお，白井家文書には，明治43年の日本種苗株式会社の『営業案内』が収録されている。この年の『営業案内』には，同社が扱っていた稲・雑穀・蔬菜・果樹類の品名一覧と注文方法のほか，「柿の珍種」と題する8種の柿の広告が掲載されている。白井家が『営業案内』を，農会を通して取り寄せたのか，独自に入手したのかは明らかではないが，いずれにせよ，蔬菜・果樹の最新品種に関する情報を得ていたことがうかがえる。また，大正4年発刊の『浦賀案内記[57]』には，大津の西村長兵衛を院主とし，「山林園芸」を扱う「種源院本店」の広告が掲載されており，営業細目は「農産種子」・「和洋草花」・「種苗販売」とされている。町内の種苗店も含めて，白井家や浦賀町農会が種苗をどのように入手し，それらが町内においてどのように流通していたのか，考察する必要があろう。

2点目は，白井太朗が郡農会主催による千葉方面への農事視察に参加したほか，浦賀町内の農家による小規模な農事視察に赴いていることである。千葉方面への視察については，「大正三年度日記[58]」10月23日条に，「浦賀町役場農会事務所ニ於て本年播種大麦・小麦・黒稲予防塩水撰・千葉県方面視察人選宅之件」と記されている。この年には白井太朗自身が千葉県に赴いたという記述がみられないため，他の農家が選ばれたと思われるが，太朗が農会役員として郡農会主催の農事視察に参加しうる立場にあり，視察に関する情報を得ていたと考えられる。そして，「大正五年度日記[59]」10月27日条には，「本日より農事視察として千葉県ニ発足す」と記されている。これが，先述した千葉・埼玉方面への視察であり，太朗も参加したのであった。

一方で，大正4年8月には，十女雄が高坂の農家である木村藤吉とともに，浦郷へ蓮田の視察に赴いている[60]。また，大正5年5月には，浦賀町各字の農家19名と白井太朗・農会役員1名の計21名で北下浦にてキュウリ栽培の視察を実施している[61]。これらは，太朗ら町農会委員が中心となって，浦賀において栽培可能な作物の視察が計画され，町内農家が参加する形で実施された視察であると考えられる。その視察地はいずれも三浦半島北部・中部の地域である。先述したように，郡農会主催の農事視察によって各町村の篤農家は先進地域の農法に関する知識を得たが，それを実践するためには各町村に適した方法を取り入れる必要があった。後述するように，三浦半島北部の土壌は重粘土壌であったため，浦賀の農業に参考となるような地域を選び，郡農会とは別個に農事視察を行っていたと考えられる。

以上のように，白井家は郡農会による三浦郡全体の農業振興の「先覚者」の一人として，農業技術の導入や試作・農事視察を行うとともに，浦賀町に適した農法を定着させるため，浦賀の農家を指導する役割を果たしていたのである。

4）明治期・大正期における白井家の蔬菜栽培・山林経営と周辺地域

a. 蔬菜の栽培

本節では，明治期・大正期において，白井家が

どのような作物を栽培していたのか，蔬菜栽培を中心に検討する。「農業日誌」には，明治８年～38年（1875～1905）の稲および蔬菜の播種の記録が含まれている。第７表に示したように，白井家では明治19年（1886）の段階ですでに19種の蔬菜を栽培していた。このうち，大麦・小麦・蕎麦・大根・牛蒡・里芋等は，昭和期まで継続して栽培されていた。

また，明治20年代後半以降になると，三河島菜・天王寺蕪などの栽培が開始されている。白井家は，後述する三浦郡農会・浦賀町農会の設立以前から，各地の特産品を積極的に導入する農家であったといえよう。このうち，天王寺蕪は白井太朗によって大正４年（1915）に三浦郡農会の品評会へ出品された。

また，白井家が農商務省や三浦郡農会・浦賀町農会の依頼を受け，新品種を導入した作物としては，大麦およびダイコンが挙げられる。大麦については，明治24年（1891）に農商務省・神奈川県・三浦郡を通してゴールデンメロン種およびケープ種の種子の配布があり，浦賀町においては白井太朗と臼井長之助が試作を行った[62]。臼井長之助は「試作報告表」において，ゴールデンメロン種は「将来ノ見込アリ」・ケープ種は「見込立タス」と評価している。「農業日誌」によると，白井太朗も明治25年～26年（1892～1893）にゴールデンメロン種を播種しているが，試作結果については記述されていない。

続いて，ダイコン栽培の状況をみていく。明治期になると，石渡坦豊が三浦半島の地味にダイコンが適することに注目し，初声村の鈴木啓蔵らの篤農家を奨励して，桜島大根・聖護院大根・宮重大根・練馬大根等の優良品種を移入することにより，改良に務めていた。なお，近世以来，浦賀には鴨居の小原台を産地とする「小原大根」という在来種が存在していた。この大根は，地域名産としての範囲で栽培され，自家利用されていたという[63]。

さて，郡農会によるダイコンの品種改良の動きのなかで，浦賀の白井家もダイコンの試作を行うこととなった。明治34年（1901）には，郡農会から白井太朗に聖護院大根・桜島大根の種子が配布され，浦賀町農会を通じて栽培方法を指示されている[64]。「農業日誌」にも，同年に両大根が「三浦試給所」より配布され，９月３日に播種したとの記述がある。しかし，虫害・降雨のため，桜島大根は「遂ニ生育せす」・聖護院大根は「不都合」という結果に終わり，継続的な栽培は行われなかった。

この年，白井家においては聖護院大根・桜島大根のほかにも，練馬大根・宮重大根が播種されている。いずれも「結果不宜」という状況であったが，明治35年（1902）にも引き続き播種されている。さらに，明治36年（1903）には札幌大根も栽培されている。郡農会の動きを受けて，白井家もダイコンの試作を行う篤農家の一家として品種改良に貢献したといえよう。そして，大正14年，岸亀蔵技師が三浦半島で生産されたダイコンを正式に「三浦大根」と命名し，京浜市場に出荷するようになるに至るのである[65]。以上のように，白井家は幕末期以来の果樹栽培・山林経営を背景として，自ら新品種の導入を行う農家であった。この基盤の上に農会からの依頼を受けた試作を行い，三浦郡全体の農業発展に貢献していったと考えられる。

b. 白井家の農業経営と周辺地域

以上みてきたような白井家の農業経営と周辺地域との関わりについて，農具の調達や雇用関係を中心にみておこう。「農業日誌」には，白井家が明治23年～大正13年（1890～1924）に購入・修理あるいは製作させた農具・家財道具等の一覧が収録されている。これらの調達先は，①東京・横須賀，②浦賀，③北下浦・衣笠・八幡，④その他の大きく４つにわけられる。このうち，①から③を第８表に示した。調達した道具類は，各地域によってどのような特徴がみられるのであろうか。

まず，①東京や横須賀では，金物・仏壇などを１度に複数入手している。白井家が高級な食器・仏具等の買い回り品を都市部にて購入していたこ

第７表　白井家における穀物・蔬菜の栽培－明治19～38年（1886～1905）－

品種／年（明治）	19	20	21	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38
大麦	●	○		○	○	○	○	○		○		○		○		○	○	○
大麦（ゴールデンメロン）					●	○												
小麦	●	○		○	○	○	○	○		○		○	○	○		○		○
冬蕎麦	●				○			○	○	○	○		○			○	○	
春蕎麦・夏蕎麦		●	○	○		○	○	○		○		○	○	○	○			○
粟	●	○		○		○		○		○			○			○		○
大豆	●			○		○		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
小豆	●			○		○		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
室葉小豆									●									
春大根・夏大根	●		○	○		○		○	○	○			○	○	○	○		○
冬大根	●	○		○	○	○		○		○		○				○	○	○
練馬大根														●	○			
桜島大根														●				
聖護院大根														●				
宮重大根														●	○		○	
札幌大根																●		
人参				●														
洋胡蘿蔔（ニンジン）							●	○	○	○	○	○	○					○
唐胡蘿蔔								●										
牛房	●	○	○	○		○	○	○		○	○		○		○	○		○
甘芋・甘藷	●	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		○	○	○	
里芋	●	○	○	○		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
馬鈴薯					●													
こんにゃく								●										
かぼちゃ													●	○	○	○		○
葱		●		○		○	○	○	○	○		○	○			○		○
胡麻	●	○		○		○		○		○	○	○	○		○	○		○
隠元	●		○	○			○	○	○			○	○	○				
金時大角豆	●	○		○		○		○	○	○	○	○	○	○	○		○	○
白大角豆・大角豆								●	○	○	○	○	○	○	○			○
ソラ豆・蚕豆	●	○		○	○	○	○	○		○					○			
エンドヲ豆		●				○												
生姜・薑	●		○						○					○	○	○		
茄子	●		○	○				○						○	○	○		
木瓜・胡瓜		●					○	○				○	○	○		○		○
白瓜								●								○		
菜				●														
正月菜																●		
白茎菜						●												
三河島菜						●	○											
らっきょう					●		○	○		○								○
わけぎ						●												
天王寺蕪							●	○	○	○				○				
菊花									●									
害虫駆除菊・除虫菊									●							○		
菜種	●	○			○	○	○	○		○		○				○	○	
綿	●	○																

（白井竜太郎家文書「農業日誌」，横須賀市史編さん室提供により作成）

注１）●：明治19年以降，はじめて栽培を確認できる年。
注２）○：栽培を確認できる年。
注３）作物名は史料上の表記にしたがった。
注４）明治22年・23年は記載なし。

第８表　白井家による家財・農具の調達－明治23～大正13年（1890～1924）－

地域	年	品名	地名	人名・店名（業種）	調達方法
①東京・横須賀	明治23	大釜	東京小網町	田中浅右衛門	購入
	明治23	香炉	東京大門通	—	購入
	明治23	青銅鍋	東京大門通	—	購入
	明治26	飯炊釜	東京小網町	田中浅右衛門	購入
	明治26	錠前	東京大門通	佐藤四郎兵衛	購入
	明治31	仏具・花瓶・蝋燭立	東京大門通	（商店）	購入
	明治38	仏壇	東京新右衛門町	安田松慶（仏師）	購入
	大正13	仏具打金	横須賀	白坂仏具屋	購入
②浦賀町内	明治24	稲扱	田中	庄七	購入
	明治27	引井戸	吉井	長島萬蔵	雇用・製作
	明治27	水汲櫓	谷戸	（桶工）	雇用・製作
	明治41	水車	田中	（鍛冶）	修理
	大正７	風呂釜	田中	庄七（釜屋）	購入
③周辺町村	明治24	肥櫓桶	八幡	本田荒物屋	購入
	明治27	唐臼	北下浦長沢	（臼工）	雇用・製作
	明治31	水車臼	衣笠	鈴木粂吉	雇用・製作
	明治34	万能	北下浦長沢	螺貝鍛冶屋	購入
	大正４	風呂桶	北下浦長沢	原常吉（桶工）	雇用・製作

（白井竜太郎家文書「農業日誌」，横須賀市史編さん室提供により作成）
注１）業種のみ記載され，人名・店名の記載を欠く場合もある。
注２）明治37年・大正５年に北下浦長沢の菱沼吉蔵を雇用し，③の唐臼を再製作させている。

とがわかる。

これに対し，②浦賀および③北下浦・衣笠・八幡については，農具や家財道具を購入しているほか，職人を雇用して製造させている。②の浦賀では，田中の「庄七」より稲扱と風呂釜を購入しているが，「庄七」とは，大正４年（1915）発刊の『浦賀案内記[66]』に広告を掲載している「カマヤ本店　太田庄七」のことであろう。営業品目としては，「銅鉄鉄鋼業・和様建築金物・万打刃物一式・鍋釜鋳物一式」とあり，日用の金物のほか，農具を扱っていたと考えられる。また，田中の鍛冶屋に水車を修理させているが，この水車は脱穀に用いていたと考えられる。

一方，③北下浦・衣笠・八幡では，唐臼などの農具を購入し，製造させている。「農業日誌」によると，明治27年（1893）・同37年（1903）・大正５年（1916）の３度にわたり，北下浦の長沢（第１図，野比の西部）の職人に唐臼を製造させている。明治27年には「長澤ヨリ来リ」と記されているのみで職人名の記載はないが，明治37年については「製造人ハ北下浦長沢菱沼吉蔵殿」と記されている。さらに，大正５年にも「北下浦長沢菱沼吉蔵殿製造す，同人ノ作是にて三度目なり」と記されていることから，明治27年以来継続的に菱沼吉蔵に唐臼を製作させていたと考えられる。なお，『北下浦郷土誌[67]』には，大正７年（1918）頃の長沢における商店の業種別軒数の記載があり，「桶屋商」として菱沼吉蔵の名が確認できる。

また，明治34年には，北下浦長沢の螺貝鍛冶屋より万能を購入している。万能とは除草用の農具であるが，うね間の中耕や土寄せにも用いるものであった。先述の『北下浦郷土誌』の商店の記載のなかに「螺貝鍛冶屋」の名は確認できないが，大正７年頃，長沢には３軒の鍛冶屋があったと記されている。また，北下浦村で製作された手工業品は，村内のほか，久里浜・浦賀・武山・長井・大楠・南下浦・三崎・初声方面へ供給されていたという[68]。

なお，④その他として，大正10年（1921）に三浦郡役所を経て静岡県の千石籠を購入している。

大正期には三浦郡農会が噴霧器・除草機・稲扱器などを取り扱っていたが[69]，千石籠もこのような農具の一種であったと考えられる。

以上のことから，白井家は買い回り品を東京・横須賀にて購入し，農具はおもに浦賀・周辺地域から調達し，これに加えて郡農会の扱う農具も入手していたことが明らかとなった。

なお，周辺地域のなかでも，北下浦の職人との関わりが深かったが，ここで注目すべきことに，白井家は農作業においても北下浦の者を雇用していた。第9表は，大正4年の「日記」に基づき，白井家の農作業における雇用関係を示したものである。これによると，白井家は年間を通して，（ア）家と（イ）家の2つの家から雇用していた。このうち，（イ）家は北下浦の野比の家であったことが明記されている。作業内容には，はんだい起こし（田起こし）・田植え・草取り・収穫といった稲作に関する作業のほか，畑作・植樹に関する作業も含まれている。

なお，（イ）家との雇用関係は遅くとも明治30年代前半頃には成立していたと考えられる。「農業日誌」には，明治39年（1906）の田植えについて，次のように記されている。

本年ハ野比長沢之人々旱魃之為ニ日傭ニ来たらず，故ニ後るゝなり
七月二日より野比の（イ）（引用者）殿人夫を連れ来りて，七月四日に田植終る

上記から，白井家が（イ）家を雇用するとともに，（イ）家を通して野比の「人夫」を雇用していたことがわかる。さらに注目したいのが，（ア）家の作業は播種や施肥など多岐にわたっているのに対し，（イ）家は耕耘や根掘りなどが多いことである。

先述したように，北下浦（野比・長沢・津久井）の土壌は，海岸線以外は主に重粘土壌である。水田や畑の耕作に重粘土地帯は最も重労働とされた[70]。そのため，北下浦においては，畑の耕作にあたって普通の鍬を用いても受け付けないため，踏鋤鍬を使用していた。このような土壌が浦賀の土壌と共通していたことが，北下浦から浦賀への農具・労働力の提供の一要因であった可能性があるが，この点は今後の課題としたい。

本章では，白井家が明治期以降農会の役員として活動し，新品種の導入にも積極的に関わっていたことを指摘した。その一方で，大正期においても，白井家に近世以来供給されてきたと思われる

第9表　白井家の農作業における雇用
－大正4年（1915）－

月	（ア）家		（イ）家	
	作業内容	日数	作業内容	日数
3	柿の枝切り 玉葱の植え直し 蜜柑の下草取り・施肥 草取り	6	—	0
4	苗代田耕起 山刈 家の下はんだい起こし 松植樹 苗代整地 蓮根植え	9	蓮根植え 田のはんだい起こし	2
5	杉木苗植樹 田のはんだい起こし 真木苅り・真木搬出	7	杉木苗植樹 田のはんだい起こし 真木苅り 草の根掘り 田の代切り	8
6	甘藷播種 田の耕耘 蓮田に施肥 田植え	9	田植え	1
7	杉苗への水やり 胡麻・粟の施肥	4	—	0
8	草取り 山刈り	3	田の草取り 山刈り	5
9	蓮根掘り 大根苗の種地起こし 畑耕耘	3	畑耕耘	1
10	施肥 山刈り 稲刈り	4	畑耕耘	4
11	稲刈り 用地耕耘	4	—	0
12	大麦播種	1	—	0
計		50		21

（白井竜太郎家文書「大正四年度日記」，横須賀市史編さん室提供により作成）
注）作物名は史料上の表記にしたがった。

周辺地域の労働力・農具が，引き続き農業経営を支える大切な要素であった。近代農法の導入はこのような基盤の上に行われたと考えられるのである。

V 『浦賀町報』にみる昭和戦前期の浦賀町と農業

1）『浦賀町報』にみる浦賀町

商工業や地域有力者の活動を基盤とした浦賀町の農業は，町内各地や各農家においてどのように展開していたのであろうか。次の史料[71]は，昭和2年（1927）当時の浦賀町における農業について述べたものである。

> 天然ノ良港ヲ有シ，古来港ノ利用ニ依リテ営ム事業頗ル多ク，従テ農業ニ従事スルモノ甚ダ多シトセズ，殊ニ横須賀海軍工廠及浦賀船渠株式会社ニ通勤スルモノ多ク，農業ニ従事スルモノ僅カニ三百余戸ニ過ズ，田ハ何レモ一毛作，畑ハ麦穀菽専トスルモ，最近農業改良奨励ノ効果ニ依リ蔬菜栽培者漸次増加ノ傾向ヲ示シツツアリ

上記では，浦賀町は従来自然の良港を利用した湊町であり，また横須賀海軍工廠と浦賀船渠株式会社に通勤する者が多く，農業に従事する者はわずかであったことが記されている。また一方では，「最近農業改良奨励ノ効果ニ依り蔬菜栽培者漸次増加ノ傾向」が指摘されている。これは，「最近」の「農業改良奨励」によって町内の農業生産に変化が生じてきていたことを示すものとして注目したい。この「農業改良奨励」は，先述したように，明治期末から大正期を通じて継続的に行われてきたものであった。

次に，『浦賀町報』から昭和戦前期の浦賀町と浦賀町農会についてみていきたい。『浦賀町報』は，昭和10年（1935）1月の第1号から昭和16年（1941）1月の第69号まで毎月発刊され，浦賀町の「通報機関」と位置づけられた刊行物である[72]。発行元は浦賀町役場であり，町の自治機構関連・政治関連・経済産業関連・社会関連・農業要覧・編集後記・広告欄という内容から構成されている。町報発刊の目的は，「要ハ町民ニ町自治ノ徹底ヲ期セントスル」ためであった[73]。また，発刊時の町長であった加藤小兵衛は浦賀町農会長を兼任しており，町報のなかには浦賀町農会の事業予定や報告，農会からの諸連絡や広報が掲載されている。したがって，浦賀町および浦賀町農会にとって，『浦賀町報』は重要な情報発信手段であった。

ところで，当該期の浦賀町において，農業はどのように認識されていたのであろうか。次の史料は，『浦賀町報』第2号[74]に掲載された農会総代選挙の記事である。

> 従来総代選挙に当ては，有権者は殆ど全面的に無関心の状態であった，随て投票に付いても棄権者多く辛じて当選法定数を得るの状況であつたことは，本町には実際農業に直接的な利害関係を持つものの少ない関係上亦やむを得なかつたとしても，農業者にとつては，農会の活動が非常に重視されてゐる今日，冷淡なる態度をとらず，相互依存的な関係を考慮して熱意のあらんことを希望して止まぬのであります。

上記では，農会総代選挙に対して「有権者は殆ど全面的に無関心」であったこと，またそれは農業従事者が少なかったためであることが述べられている。同時に，当該期における農会の重要性の一方で，すべての個別農家が農会の事業に必ずしも積極的に対応していったわけではなかったことがうかがえる。そうした状況において，町は農家に対し，農会活動への一層の「熱意」を求めていたのである。

このように農業が注目された背景には，農山村経済更生運動とのかかわりとともに，浦賀町内における農作物需要の高まりがあったと考えられる。すなわち，大正末期から昭和前期にかけて，浦賀町では大きな人口増加がみられたのである。大正14年（1925）に18,637人であった人口が，昭和5年

(1930) には20,136人，同15年（1940）には23,198人へと増加していた[75]。この背景の一つに，「大津の住宅地として湘南電鉄開通後の驚くべき発展」があった[76]。また，同11年においては，大津のみならず浦賀町北部地区のさらなる宅地化が予測されていたのである[77]。このような交通機関の発達と人口増加によって，農作物需要のさらなる高まりが見込まれた。

以上のような状況下で，浦賀町農会はどのような事業を展開していたのであろうか。『浦賀町報』第12号では，昭和９年度の農会事業報告記事が掲載されている[78]。同報告のなかで注目したいのが，「果樹栽培奨励」，「果樹剪定指導」，「蔬菜指導圃の経営」といった蔬菜栽培奨励に関する事業である。蔬菜栽培奨励は明治末期から行なわれてきたものであったが，「最近農業改良奨励ノ効果ニ依リ蔬菜栽培者漸次増加ノ傾向ヲ示シツツアリ」ともあるように，昭和期に至って町内の農家へ徐々に浸透し始めた様子をうかがうことができる。上記の事業報告もまた，さらなる生産増加を目指す農会の姿勢を反映しているといえよう[79]。さらに『浦賀町報[80]』では，町内の果樹栽培について次のように言及している。

> ブドウは茲三四年来急に増産したもので年産二千八百円，主として小原を中心に産出する，将来特産として発達の可能性十分である

すなわち，ブドウ生産は昭和６・７年（1931・32）前後から急増したものであって，特に小原が中心的な生産地となっていた。同時に，浦賀町や農会は，将来的なブドウの特産物化を展望していたのである。ここでも，昭和初期がブドウの増産における一つの画期となっていたことがわかる。なお，ブドウの生産は小原と並んで鴨居でも盛んに行われており，より一層の生産量増加と市場での活躍が期待されていた[81]。このほか，浦賀町と町農会では，市場出荷を目的として渋柿から甘柿への転換を目指し，柿の高接木を行う技術も導入した[82]。

以上のように，浦賀町と町農会では市場への出荷を念頭に置いた奨励策をとっており，当該期は本格的に市場出荷を目指した生産促進期であったといえる。浦賀町周辺には，浦賀青物市場・横須賀の株式会社丸一横須賀食品市場及び東京市場といった大小複数の市場があった。また大正末期から昭和前期は，浦賀町内の人口増加期であり，東京市でも人口増加と都市化が進展した時期でもあった。こうした背景のもとで，農作物の需要が一層高まっていたことが考えられよう。さらに同時期には，同じ三浦郡内の上宮田や津久井地区から，東京や横須賀市場へダイコンやジャガイモが出荷されていったことが明らかにされている[83]。浦賀町の農作物出荷志向は，三浦郡内から郡外への市場出荷機運と軌を一にしていたと考えられるのである。

こうした一連の蔬菜栽培奨励は，農業奨励の予算編成や実際の事業展開・町内への情報発信といった諸側面にわたり，町と農会が一体となって行ったものであった。

２）浦賀町における農業の展開

『浦賀町報』に掲載された農業関係記事のうち，町内で栽培されていた農作物の一端をうかがうことができるのが，農水産物品評会に関する記事である。昭和10年（1935）１月発行の『浦賀町報』第１号では，「農水産物の尤を集めて品評会開催」という見出しのもと，同年１月15・16日に浦賀小学校にて行われる品評会の出品募集記事が掲載された[84]。なお，昭和２年の品評会出品資格としては「浦賀町ニ居住スルモノ」とし，「出品者ハ自家ノ生産シタモノニ限」る，とされていた[85]。昭和10年から16年までの間，浦賀町の品評会は毎年１月に行われており，優等・１等・２等・３等・４等の等級がつけられた。そして同年の町報２月号において優等及び１等受賞者名・居住地区・受賞作物名が掲載されたのである。なお，2等以下の場合，受賞者の氏名は割愛され，受賞作物数のみが掲載された。

第10表は，①農水産物品評会で優等または１等

となった農作物名，②三浦郡農会役員であった高坂の白井家において，昭和16年５月から８月の間に栽培されていた農産物名，③『浦賀町報』の「統計雑報」欄に掲載された農作物名を示したものである。これらから当該期の町内で栽培されていたすべての蔬菜類を網羅することは困難であるが，１年間のうちに栽培された蔬菜類を大観することが可能である。

まず，品評会受賞作物をみていきたい。品評会で優等または１等を獲得した農作物をみると，大根・小蕪・ホウレン草・白菜・ネギ・鶏卵など，日常の需要に即応する農作物が多いことがわかる。なかでも，浦賀町の小原で生産されていた「小原大根」は，在来野菜として江戸時代・明治期から既に存在していた[86]。

次に，白井家で栽培されていた作物をみると，33点にものぼる多様な作物が栽培されており，そのうち市場出荷を目的とした作物も多数見受けられる（第10表）。

さらに白井家の栽培作物のなかで注目したいのが，市場出荷欄にも名が挙げられている苺である。『浦賀町報』第16号によれば，「昭和11年度農会事業方法決定」のなかに「柿・石垣苺特産奨励」が含まれている[87]。第10表における「苺」が石垣苺であるか否かは判然としないが，白井家では農会で奨励された作物を積極的に試作し，栽培していったと考えられる。

つづいて，第10表のうち，キュウリ（作物番号10）・ジャガイモ（作物番号14）・スイカ（作物番号22）・ホウレンソウ（作物番号43）といった農作物に注目したい。大正期から昭和戦前期にかけて，三浦郡ではこれらの作物が商品作物として生産されており[88]，浦賀町における蔬菜栽培も，こうした郡内の蔬菜生産傾向と軌を一にしていたと考えられる。

これらのほか，「統計雑報」欄には麦類・雑穀類・イモ類・豆類・野菜及び果樹類といった農作物が挙げられている。特にブドウに関しては，「茲三四年来急に増産したもので」と急速な生産量の増加が報じられ，将来的な特産物化への可能

第10表　浦賀町内にて栽培されていた農作物
－昭和10～16年（1935～1941）－

作物番号	農作物名	①	②	②-2	③
1	小麦	○	○		○
2	大麦		○		○
3	大豆		○		○
4	小豆				○
5	甘藷		○		○
6	ブドウ				○
7	エンドウ				○
8	ソラマメ				○
9	インゲン		○		○
10	キュウリ		○		○
11	ナス		○		○
12	花百合				○
13	トマト		○		○
14	馬鈴薯		○		○
15	梨				○
16	生柿		○		○
17	梅				○
18	桃				○
19	アワ		○		○
20	黍				○
21	ソバ				○
22	西瓜		○		○
23	唐辛子				○
24	水稲		○		
25	ササケ		○		
26	ドタ瓜		○		
27	キャベツ		○		
28	蓮		○		
29	ラッキョウ		○		
30	苺		○	○	
31	サトイモ	○	○		
32	冬ネギ		○		
33	ゴマ		○		
34	葉豆		○	○	
35	蕗		○	○	
36	ミョウガ		○	○	
37	大根	○	○	○	
38	小蕪	○	○	○	
39	ミカン		○		
40	バカ		○	○	
41	ネイモ		○	○	
42	葉豆		○		
43	ホウレンソウ	○	○	○	
44	人参		○	○	
45	玉ネギ				
46	小松菜	○			
47	温州	○			
48	夏柑	○			
49	鶏卵	○			
50	結球白菜	○			
51	白菜	○			
52	ネギ	○			
53	八ツ頭	○			

（『浦賀町報』第２号，第14号，第41号，横須賀市自然・人文博物館所蔵，白井家文書「行事予定表」により作成）
注１）①：農水産物品評会で優等または１等となった農作物名（昭和10～16年）。
②：白井家において，昭和16年５月から８月の間に栽培されていた農作物名。
②-2：白井家で栽培された農作物のうち，市場出荷と記されたもの。
③：『浦賀町報』の「統計雑報」欄に掲載された農作物名（昭和10～16年）。
注２）農作物名は史料中における表記にしたがった。

性も述べられていた。このように「統計雑報」欄には，栽培奨励と特産物化をめざす作物も掲載されていた。

以上から，昭和戦前期の浦賀町で栽培されていた農作物としては，①「統計雑報」や白井家にみられるような自給用農作物，②奨励によって増産と出荷を目指す蔬菜類，③白井家にみられるような，市場出荷用として栽培される農作物，④石垣苺にみられるような試作的な作物であった。つまり浦賀町では，耕地面積が少なく従来の港町としての性格を有しながらも，消費を支える近郊農業の発展が志向されていたといえる。これらの背景としては，第一に商店や飲食店が並ぶ町場や浦賀ドック，さらに横須賀海軍といった消費地の存在が挙げられよう。すなわち，浦賀町自体が生産地と消費地という両側面を有していたとともに，町の外にも大きな市場が存在していたのであった。自給的農作物と市場出荷を目指す農作物の栽培が奨励される積極的背景には，こうした地理的・経済的基盤が存在していたのである。

ところで，昭和11年（1936）から昭和15年（1940）までの品評会において，優等と1等を獲得した品目と受賞者の居住地の対応を図示したものが第6図である。第6図をみると，町内で受賞農作物が多い地区は吉井・池田・新巻・久比里・鴨居といった地区である。池田と吉井地区は，当該期の浦賀町内では比較的田地の多い地区であり，鴨居は小原と並び，昭和戦前期に果樹栽培が盛んに行われていく地区である。浦賀町内では，これらの地区が主な蔬菜類栽培地域であった。また，作物によって優等と1等を獲得する地区が分かれており，特に荒巻での受賞が多いことがわかる。

ここでは，荒巻からの受賞作物としてみられる小松菜に注目したい。『浦賀町報』によれば，昭和10年から同14年（1939）（同11年は受賞者の記載なし）にかけて，小松菜の1等受賞者は全て荒巻地区の農家であった[89]。受賞したのは，昭和12年を除いてすべてA家である。また，年代は異なるものの，A家はホウレンソウ・温州・大根・小蕪でも1等を受賞しており，多角的な経営を行っていた。このような，一つの作物について一つの農家が継続的に受賞している例は，大根に関して久比里のC家，小麦に関して池田のD家といったように複数みられる。これらの背景には，栽培環境・技術・種苗の継承が考えられよう。

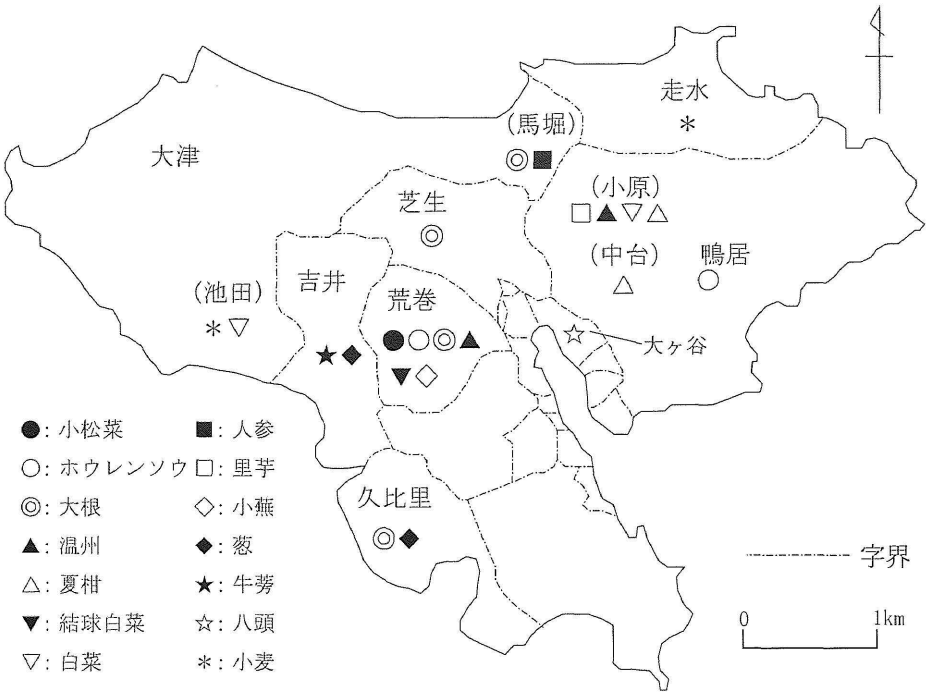
他方，浦賀町内におけるこうした品評会は，すでに大正期から行われていた。第11表は大正11年（1936）に開催された浦賀町農水産物品評会で，1等から4等を受賞した農作物を，字ごとに分けたものである。栽培されていた農作物は昭和期の農作物と比較的共通していることがわかる。

また，字ごとに栽培されていた作物をみると，特に小松菜・チリメン白菜・大根・夏蜜柑は複数の地区で受賞作物となっている。優等や1等ではないものの，町内で栽培されていた農作物は比較的共通していたことがわかる。こうした共通性に加えて，消費地との関係，地味・技術や種苗の継承・伝播といった諸条件のなかで，昭和期には次第に農作物生産の地域的な差異が現れていったと考えられる。この地域差及び背景は，今後明らかにすべき課題である。

3）浦賀町の農作物と流通
―荒巻の専業農家を一例として―

本節では，戦前から荒巻で専業農家を営んでいた長島家を事例として，農家と町内との関わりを具体的にみていく。

さて，長島家が農業経営を行ってきた荒巻は，主に傾斜地を利用した畑作農業が行われてきた地区である（写真2）。これまでみてきた『浦賀町報』よりも年代はやや下るが，昭和20年（1945）当時の長島家において栽培されていた主な蔬菜類は，夏はキュウリ，冬はタカナ・カラシナ・ニネゴであった。小麦も栽培していたが，市場出荷は行っていなかったという。また夏蜜柑やブドウといった果樹栽培は行っていなかった。上記の作物は，第11表や農会奨励作物と必ずしもすべてが一致しているわけではない。つまり浦賀町内における農業生産の実態は，町内の地区や農家によって多様であったことを示している。



第６図　農水産物品評会における優等・１等受賞者と作物名－昭和10～15年（1935～1940）－

（『浦賀町報』第２号，第14号，第30号，第38号，第50号，第62号により作成）

注１）『浦賀町報』にみられる農作物のうち，野菜・果樹・小麦のみを図示した。また，受賞年代は区別せず，昭和10年から15年の間に各地区において受賞した農産物を示した。

注２）地名のうち，（）内は小字名を示す。

一方で，贈答や日常の付き合いのなかで農業に関する情報や農作物の交換が行われており，奨励作物栽培の普及は，様々な場面で行われていた。農水産物品評会も，こうした情報・技術の交換機会として重要な場であった。その一例が，種の購入である。かつての浦賀町では，農作物の種は直取りを基本としており，品評会で優秀な成績を獲得した農家から種を購入することもあったという。上記の具体的な年代は明らかではないが，農家間における情報・技術交流の場として，品評会が機能していたことを物語っている。

ところで，町内で生産された農作物はどのようにして町内外へ出荷されたのであろうか。長島家への聞き取りによれば，昭和20年前後の荒巻周辺における中心的な農作物の出荷先は，浦賀の青物市場であった（第７図）。同市場には，現在の横須賀市津久井地区からも農産物が持ち込まれたという。長島家では，戦前から浦賀の青物市場に農作物を出荷していたが，野菜類の生産量が増加するにしたがい，昭和28年頃には横須賀市場へ出荷するようになっていた。なお，この当時の荒巻周辺では，すでに横須賀へ出荷していた農家もあったという。

荒巻において，こうした農作物の出荷手段として自動車が使用されたのは，基本的には戦後のことであった。それまでは，リアカーをつけた耕運機や牛車が用いられていたという。これは荒巻の農地が山の上に位置しており，細い急斜面の道に

第11表　第１回農水産物品評会受賞作物
－大正11年（1922）－

字名	作物	作物数
吉井	米・大豆・小松菜・蓮根・人参・夏蜜柑・ホーレン草・黒大豆・俵■・紅梅・大麦・里芋薑・葱・牛蒡・南天・根芋・牛蒡・小豆・薑・■マサキ・シネムジヤウ・豌・落花生	23
荒巻	牛蒡・小松菜・米・チリメン白菜・小豆・大根・里芋・玉子・夏蜜柑・京菜・天狗蜜柑・豌・蕪菁	14
池田	米・大豆・薑苛・白菜・小松菜・甘藷・小豆・夏蜜柑・シネムジヤウ・蕪菁・梅干・薑	13
久比里	鹿尾菜・大麦・玉子・大根・葱・八■・和布・小麦・米・海苔・オゴ	12
鴨居	温州・椎茸・玉子・ジャボン・夏蜜柑・甘藷・大根・鹿尾菜	8
高坂	チリメン白菜・小松菜・薑苛・夏蜜柑・クワイ・玉子・京菜	7
川間	チリメン白菜・小松菜・大葉・蜂蜜・大■菜・夏蜜柑	6
小原	大豆・小麦・夏蜜柑・大根	4
走水	大根・鹿尾菜・蕪菁	3
井田	人参・チリメン白菜・夏蜜柑	3
東竹沢	大麦・米	2
馬堀	人参	1
芝生	玉子	1
大津	里芋	1
蛇沼	米	1
根岸	夏蜜柑	1
保込	大豆	1
西竹沢	夏蜜柑	1
薑苛（不明）	温州	1
■■	温州	1
■沢	大麦	1
矢ノ津	－	0
大ヶ谷	－	0
中台	－	0

（白井竜太郎家文書，「農会関係書類」，横須賀市史編さん室提供により作成）
注１）農作物名は史料中における表記にしたがった。
注２）－は農作物の記載なしを示す。

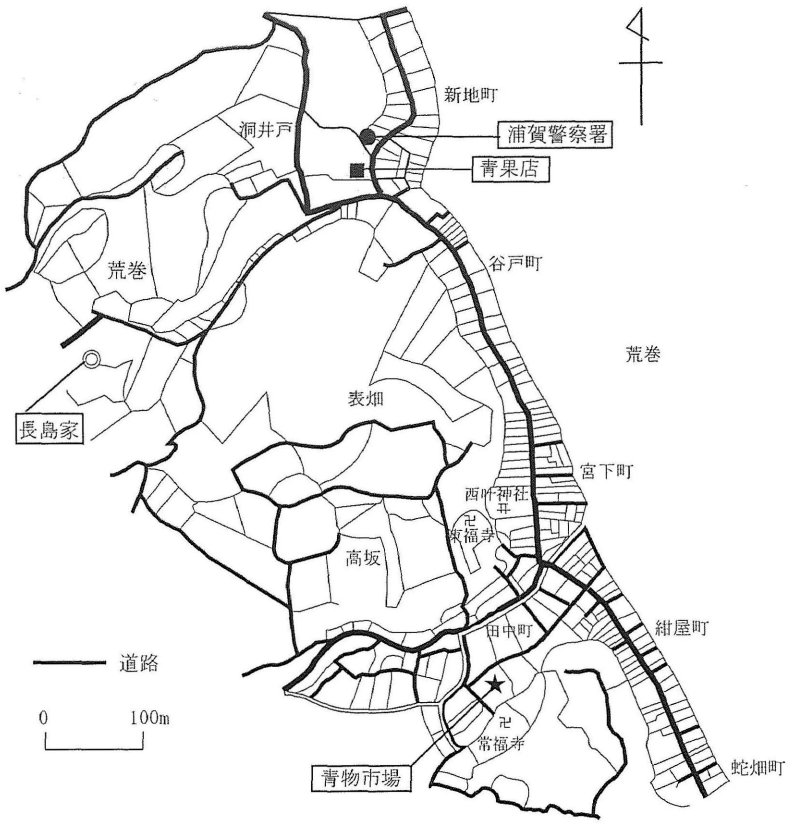
トラックが入ることができなかったためである。

第７図に示した長島家と浦賀警察署の間に広がる地区は従来田地であったが，そこに浦賀ドック

写真２　荒巻における長島家の畑
（2009年７月１日　岩本和恵　撮影）
注）現在の長島家が経営している畑地の一部。畑は傾斜地を利用しており，写真の奥は浦賀湾・鴨居方面。

の社宅が建設されていった。浦賀ドックの沿革は市村[90]に詳しいが，昭和44年に浦賀ドックと住友重機械工業が合併しており，その社宅は，芝生・大津・荒巻・久里浜・川間といった地区に広がっていた。長島家では，こうした社宅住民に対して農作物を販売していた。昭和40年代から50年代にかけて，「しょいびく」に野菜を積んで「住友の団地」を回り，「住友の奥さんたち」を対象として野菜を販売していたこともあった。なお，ドックの社宅を対象とした野菜類の小売は，浦賀ドックと住友重機械工業の合併以前から行われていたものであったという。こうした販売形態は，戦後のドック経営や社宅増設に対応した販売方法であった。

さらに，昭和戦前期の農会事業として共同出荷が挙げられるが，荒巻では昭和30年代の頃にキュウリの「共選」（共同出荷）を行ったのが初めてのことであったという。これは吉井地区と共同で行ったもので，トラックでキュウリを集荷して回った。この「共選」は，必ず農協が中心となって行っていたという。すなわち，生産量の増加と良好な品質を背景に，市場へ積極的な進出を目指す農協の戦略でもあった。浦賀町内では昭和戦前期から農会主導による共同出荷が行われていた



第７図　浦賀町の青物市場と八百屋
（浦賀文化センター所蔵地籍図および聞き取りにより作成）
注）平成初年頃までは，■で示した青果店に隣接してもう一軒の青果店が営業していた。

が，『浦賀町報』に見られるような「共同出荷」の実施は，町内でも地域ごとに違いがあったのである。先述したような，兼業農家の多さという経営形態も，こうした地域差を生む一要因であったと考えられる。すなわち，専業農家は作物を多く生産し，市場に出荷する必要がある。しかし，兼業農家は主たる収入が農業以外にあるため，必ずしも市場に出荷する必要がないという[91]。

これらの点から，農産物の市場出荷において，その手段や契機は単に耕地面積に規定される生産量のみならず，「兼業農家」の多さにも起因していると考えられるのである。出荷の主体や形態・運送手段・市場への出荷時期は，三浦郡内・浦賀町内それぞれにおいて地域的な差異をともなって展開していたのであった。

ところで，農家と町とのつながりで注目したいのが，町内の青物市場と八百屋である。浦賀の青物市場で農産物を購入したのは八百屋や漬物屋であったが，彼らはより品質の良い野菜を求めて，市場を通さずに個別の農家へ直接仕入れに出向くことがあった。荒巻にあった八百屋の一つでは，市場や農家から仕入れた野菜を販売しながら，得意先を回って注文をとっていたという。このほか，農家と町との関わりとしては，農家が料理屋へ野菜を直接卸すということも行われていた。このように，必ずしも市場を通さない農家と消費者との関係が成立していた。これらはまた，兼業農家の経営を支える要素ともなったと考えられる。

以上から，浦賀町における農家と町の関わりについて，次のように整理することができる。第1に，神奈川県農会や三浦郡農会と連動する浦賀町農会は，品評会が各農家間の情報・技術交換の場として機能していたように，個別の農家へ新たな品種や技術を伝達させる役割を果たした。第2に，浦賀町内の青物市場と八百屋の機能，そして料理屋や住宅地へ小売を行う農家の販売行動を通して，農家・販売店・消費者が密接に結びついていた。

本章では，『浦賀町報』と長島家への聞き取りにより，浦賀町内における農業の展開と流通について具体的に検討してきた。浦賀町農会は，町外市場への出荷を念頭に置きながら町内農家への農事指導や情報発信を行っていたことが明らかとなった。その一方で，昭和戦前期における町外や郡外への出荷は必ずしも大きな成果を挙げていたとはいいがたい。そうした背景の一つとして，浦賀町自体が有した消費地としての性格を挙げることができよう。そのため，町内で生産された蔬菜類は必ずしも出荷用とはならず，むしろ町内や町外周辺地域の需要を支えていたのである。そしてこうした町内への野菜の供給は，浦賀町の農家のみではなく津久井や下浦といった周辺地域の農家によっても行われていた。

Ⅵ　むすびにかえて

本稿では，明治後期から昭和戦前期における浦賀町の特質について農業を中心に考察してきた。浦賀町は都市近郊・農村・漁村のすべての性格を有する町であり，三浦半島の他町村と比較して農地が狭隘であった。この条件において農業経営が維持されてきた理由として，次の3点が挙げられる。1点目はドック工員と農家の兼業の事例を挙げたように，農業と商工業が相互依存的に成立していたことである。2点目は，地域有力者であった浦賀の農家や商家が，浦賀町・三浦郡の農会の活動を支えていたことである。さらに，3点目として，農作業における雇用関係・農具の製造といった三浦郡の他町村との関わりが維持されていたことである。

こうした前提において，浦賀町と浦賀町農会は，明治末期から昭和初期にかけて積極的な蔬菜栽培奨励や農事視察を行い，市場出荷をめざした諸事業を展開した。その背景には，横須賀市場や浦賀ドック・陸海軍との関係に加えて，湘南電鉄開通による急激な人口増加にともなう，農作物需要の高まりがあった。浦賀町では，三浦郡農会による農作物の生産及び出荷の動向と軌を一にしながら，農作物の生産増加と町外市場出荷を模索していった。そして，地味や消費地との関係，技術や種苗の継承・伝播といった諸条件のなかで町内における地域差を生じつつも，町が主導する形で蔬菜・果樹の生産・供給がなされるようになった。

一方で，浦賀町内の農家は，浦賀の青物市場への出荷や料理屋への卸売り，さらに住宅団地を対象とした小売りも行っていた。そのため，町や農会が意図する浦賀町外市場への出荷が，必ずしも成果を挙げたとはいえない。しかしながら，町自体が消費地であるために品質の高い農作物が必要とされ，農業振興に結びついたであろうことは想像に難くない。この点は，生産活動を行いつつも，町自身が消費地としての性格を有していた浦賀町の特徴といえよう。

以上のように，近代における農業を通して明らかにしてきた，浦賀町の特質を指摘したい。近世に廻船の拠点であった浦賀町は，近代においても流通の結節点・消費地としての性格をもち，浦賀ドックや軍との強い結びつきを有しながら発展したという歴史的経緯を有している。このような浦賀町は，町外・町内の双方に農作物を供給する生産地としての役割も果たしていたのである。

浦賀町における農業は，生産・消費・流通という複合的性格を有した地域における農業展開の一例と位置づけることができよう。

本稿では，このような浦賀町の農業経営が，三浦半島における農業振興の動きに対応しつつ行われていたことを指摘した。さらに今後は，郡政に関わる地域有力者を輩出した浦賀町が，他町村を

含む郡全体の農業にどのような影響を与えていったのか検討する必要がある。これにより，近代三浦半島における農業の展開や，農業を通した地域間の関係を明らかにすることが課題である。

付　記

本稿の作成にあたり，浦賀文化センターの皆様，横須賀市史自然・人文博物館学芸員の安池尋幸先生，横須賀市史総務部総務課市史編さん担当の神谷大介氏には，貴重な資料をご提供いただいたほか，調査に関するご助言・ご教示を賜りました。また調査全般にわたり，宮井新一氏，山本詔一氏には史料や写真の閲覧のご許可をいただいたほか，多くのご教示をいただきました。聞き取り調査においては，長島ミチ子氏・長島次郎氏・長島タク江氏，財部齢子氏から貴重なお話を賜り，調査を一層充実したものにすることができました。そのほか，JAよこすか葉山の皆様・横須賀市立図書館の皆様をはじめ，多くの方々からご教示・ご協力を賜りました。記して厚くお礼申しあげます。

なお，本文の執筆は，Ⅱ章1～3節・Ⅲ章2節・Ⅲ章4節・Ⅳ章を吉村，Ⅲ章1節・Ⅲ章3節・Ⅴ章を岩本，Ⅰ章・Ⅱ章4節・Ⅵ章を吉村・岩本が担当しました。

注および参考文献

1）①加藤晴美・千鳥絵里（2006）：浦賀湊の景観及び機能とその変容過程，歴史地理学調査報告，12，63～91。②吉村雅美（2006）：明治期西浦賀における問屋の経営の変遷－宮井家と清喜丸の航海を中心として－，歴史地理学調査報告，12，93～111。③市村真実（2006）：浦賀の発展における浦賀ドックの意味，歴史地理学調査報告，12，113～131。
2）①浦賀船渠株式会社編・発行（1957）：『浦賀船渠六十年史』。②福井隆雄他（1997）：『浦賀・追浜百年の航跡』，住友重機械工業株式会社横須賀造船所。
3）清水克志・清水ゆかり（2006）：三浦半島における野菜生産地域の発展とその歴史的基盤－下浦地域を事例として－，歴史地理学調査報告，12，40ページ。
4）澤田浩之（1981）：三浦半島南部における野菜産地の形成と構造，立正大学人文科学研究年報，19，43～59。
5）前掲3），31～61。
6）三浦半島農業改良推進協議会編・発行（1972）：『三浦半島農業のあゆみ』，4ページ。長島次郎氏のご教示。
7）前掲1）①，82ページ。
8）横須賀市立図書館所蔵「浦賀町勢要覧」。
9）前掲1）③，117ページ。
10）前掲2）①，66～68。
11）「白井太朗」と「白井太郎」の双方の表記がみられるが，同一人物である。本稿では，「白井太朗」に統一する。
12）横須賀市編・発行（2007）：『新横須賀市史　資料編　近現代Ⅰ』，408ページ。
13）前掲1）②，106ページ。
14）前掲1）②。②加藤晴美（2009）：近代浦賀における商家経営とその変容－東浦賀・米穀問屋美川家を中心として－，歴史地理学野外研究，13。
15）横須賀市立図書館所蔵『神奈川県三浦郡勢一班』。
16）前掲14）②，32～33。
17）前掲1）①，65～71。
18）前掲12），690～692，700～701。
19）前掲12），700～701。
20）横須賀市編・発行（2005）：『新横須賀市史　資料編　近世Ⅱ』，872～895。
21）前掲1）①，80～81。
22）横須賀市自然・人文博物館所蔵白井家文書所収。後述する白井家の関係文書は，横須賀市自然・人文博物館所蔵白井家文書のほか，横須賀市史編さん室に白井竜太郎家文書として伝存している。
23）前掲6），68ページ。
24）前掲注23），18ページ。財部齢子氏より聞き取り。
25）神奈川県三浦郡浦賀町立尋常高等浦和小学校内職員懇話会編（1914発行，1978復刻）『浦賀案内記』，浦賀案内記頒布会，9ページ。
26）前掲15）。
27）浦賀文化センター所蔵『浦賀町報』第41号，昭和13年5月。
28）横須賀市自然・人文博物館所蔵白井家文書，「高坂町内会世帯調査票」。
29）荒巻の専業農家である長島ミチ子氏からの聞き取りによる。
30）前掲12），306ページ。
31）前掲12），197ページ。
32）『毎日新聞』明治28年10月17日，第5面。
33）前掲12），280ページ。
34）前掲12），293～296。
35）以下，興産会および石渡坦豊に関しては，永塚利一編集・発行（1939）：『石渡坦豊伝』による。
36）前掲35），75～76。「二元老」のもう一人は藤沢の金

子角之助。
37) 有限責任販売購買組合三浦興産会編・発行（1910）：『三浦興産会第三年度事業報告』・同編・発行（1911）：『三浦興産会第四年度事業報告』（横須賀市自然・人文博物館所蔵白井家文書）。
38) 前掲35)，39～40。
39) 前掲３)，39ページ。
40) 白井竜太郎家文書，「浦農通知綴」横須賀市史編さん室提供（読点は引用者）。
41) 前掲25)，９ページ（読点は引用者）。
42) 前掲40) 明治44年12月６日，高坂　白井太朗宛　浦賀町農会「蜜柑苗木共同購入ノ件」。
43) 前掲３)，39～41。
44)『浦賀町報』第２号，昭和10年２月。
45) 前掲35)，94ページ。
46) 横須賀市自然・人文博物館所蔵白井家文書，『神奈川県農会明治四十三年度会務状況報告書』。渡辺善次郎（1991）：『近代日本都市近郊農業史』，論創社，289～290。
47) 横須賀市自然・人文博物館所蔵白井家文書，『三浦郡農会　第二十二回視察報告』。視察に参加した田浦町の石井武雄を中心に作成された。謄写版の資料であるが，表紙に「大正五年十月　埼玉県・千葉県　両所五日間視察ニ付　白井太朗」と墨書されている。
48) 浦賀古文書研究会編・発行（1981）：『浦賀中興雑記』。『浦賀中興雑記』は，西浦賀叶神社の宮司感見宗之助が，支配関係・検地関係・宗教関係ほか，近世の浦賀の生活に関する資料を，明治中期頃に収集・編さんした資料集である。
49) 前掲48)，37～48。
50) 白井竜太郎家文書「農業日誌」，横須賀市史編さん室提供。幕末期から大正12年にかけての，白井家の稲作・畑作や山林経営・果樹栽培に関する記録。
51) 明治22～40年　町会会議録」旧浦賀町，前掲12)，135～137。
52) 臼井儀兵衛が町長当選の後に辞退したため，再選挙として実施された。
53) 白井竜太郎家文書「日記」（明治44年～45年）・「大正四年度日記」・「大正五年度日記」，横須賀市史編さん室提供。これらの日記は白井太朗が記したものと考えられる。各日，天気の記録がみられ，必要に応じて農作業や農会活動に関する記述が付されている。
54) 天保６年（1836），大津の池田町の有力農家に生まれた。幕末期に大津村名主・農民世話役・三浦郡大惣代等を勤め，明治４年に第２区11か村の区長に就任。明治11年から20年間，三浦郡長を勤めた。
55) 白井竜太郎家文書「日記」明治45年４月10日条，横須賀市史編さん室提供。「三浦郡農会明治三八年度会務報告書」，前掲12)，316～321。
56) 白井竜太郎家文書「大正四年度日記」11月24日条，横須賀市史編さん室提供。
57) 前掲25)，付録の広告，35ページ。
58) 白井竜太郎家文書，横須賀市史編さん室提供。
59) 白井竜太郎家文書，横須賀市史編さん室提供。
60) 白井竜太郎家文書「大正四年度日記」８月24日条，横須賀市史編さん室提供。
61) 白井竜太郎家文書「大正五年度日記」５月15日条，横須賀市史編さん室提供。
62)「明治24年　訓令綴込」旧浦賀町・「明治25年　郡役所令達」旧浦賀町，前掲12)，303～305。
63) 前掲６)，15ページ。
64)「白井竜太郎家文書」，前掲12)，305～306。
65) 前掲３)，41ページ。
66) 前掲25)，61ページ。
67) 北下浦郷土誌編集委員会編・発行（1985）：『北下浦郷土誌』，247～249。
68) 前掲67)，261ページ。
69) 前掲67)，225ページ。
70) 前掲67)，225ページ。
71) 浦賀町（1976復刊，1900初版）『浦賀町勢一覧　昭和二年』郷土の歴史をさぐる会，7～8，（読点は引用者）。
72)『浦賀町報』第１号，昭和10年１月。
73) 前掲72)。
74) 前掲44)，（読点は引用者）。
75)『浦賀町報』第17号，昭和11年５月。
76)『浦賀町報』第13号，昭和11年１月。
77) 前掲76)。
78)『浦賀町報』第12号，昭和10年12月。
79) 本文中に示した事業内容のほか，「品評会」，「講習講和会」，「小麦共同出荷」，「農事視察」など計16項目の事業が報告された。
80) 前掲74)。
81)『浦賀町報』第５号，昭和10年５月，および『浦賀町報』第６号，昭和10年６月。
82) 前掲81)，『浦賀町報』第５号。
83) 前掲３)，41～43。
84) 前掲72)。
85) 白井竜太郎家文書「浦賀町第七回農水産物品評会規則」，横須賀市史編さん室提供。
86) 前掲３)，39ページ。
87)『浦賀町報』第16号，昭和11年４月。
88) 前掲３)，37～38。
89)『浦賀町報』第２号　昭和10年２月，第14号　昭和

11年２月，第30号　昭和13年６月，第38号　昭和13年２月，第50号　昭和15年２月，第15号　昭和15年２月。

90）前掲１）③，127～128。

91）荒巻の専業農家である長島ミチ子氏及び長島タク江氏からの聞き取りによる。昭和戦前期との時期的な差異も考慮する必要があるが，農業経営と市場出荷に関する参考として記した。